

倒れるのか

著・イラスト
FALSE

女苑の病に

今宵誰が

ON SALE!

売り券好評発売中
劇場のライブステージにて
はと...ットいなばまで

目次

1st Stage

未確認飛行ジャーマネ…………… 5

2nd Stage

幻想っ娘は宵越しの銭を持たない…… 47

3rd Stage

咲き誇る憑依華（仮）…………… 109

4th Stage

そのエゴイスト、飄逸に過ぎ…………… 155

5th Stage

病人は造られる…………… 203

Final Stage

されど疫病神は舞台に向かう…………… 246

当作品は ZUN 氏が制作している「東方プロジェクト」シリーズの二次創作作品です。

本作における、人物・団体は原作に必ずしも一致するものではありませんので、あしからずご了承ください。

1st Stage

未確認飛行ジャーマネ



富を奪う疫病神は、奪われても困らないやつから奪うようになったという。

「なるほど」

みしり、体重をかけた腕が板張りの塀を軋ませる。その向こうでは瘦せぎすの男が、腹ばい
に押さえつけられていた。加害者は、腕に刺青を入れたゴロツキ二人。

「見せもんじゃねえぞ、お嬢ちゃん。帰って母ちゃんの乳でも吸ってな」

もう一人、大柄な体躯と顔にみにくい切り傷を持つ男が腕組みをしたままそいつにすごんだ。
男の手にはお粗末な布の巾着袋が握られている。

「あらやだ。そんなガキに見えるう?」

そいつは、猫なで声を出しながら路地裏に踏み入ってきた。そのあんまりにもゴージャスな
姿にゴロツキたちは顔を引きつらせた。耳、首に五色に光る宝石をぶら下げ、ケバケバしい柄
のコートを羽織り、親指を除く全ての指に指輪をはめ、頭にはシルクハットだ。

「それよりさ、あんたたち。私と楽しい遊びをしない? 天に昇るほど気持ちのいいア・ソ・ビ」
スカートの裾をつまみ上げる。薄衣一枚隔てた下に生足の肌色がのぞいた。顔を見合わせる

ゴロツキども、そして吊り上がる口の端。正直な男の子だ。

「いいねえ、どんな遊びをするんだ？」

ゴロツキのボスが、両手を広げて女に近づく。女が笑うのに合わせてそよ風が巻き起こり、路地の砂埃がわずかに舞った。

「それはねえ……」

ゴロツキの両手が女に触れるほどまで近づいた、そのときだ。風に舞って飛んできた何か、ゴロツキの顔に貼りついた。

「なっ」「こういう遊びだーっ！」「ぐわーっび！」

指輪をはめた拳による強烈な打撃が、ゴロツキの顔面に叩き込まれる！ 血と歯のかけらを撒き散らしながら巨軀が大きくのけぞった。

ゴロツキが、顔にまとわりついたピラミたいな何かを引き剥がす。

「て、てめ」「おらーっ！」「げぼーっ!？」

間髪入れずに、みぞおちへ追撃の一撃！ 黄色い吐瀉物を吐き出しながら、ゴロツキの頭が下がる。そこへとどめのアッパーカットだ！

「天に昇れーっ！」「あがーっ!!」

顎を砕かれたゴロツキが宙に浮かび、そのまま中途半端な空中バック転を決めて壁に激突。赤い筋を残して地面に沈む。

「ひいひい、ててて鉄ちゃんが！」「ばば化け物おおお!」

残りのゴロツキ二人は震え上がった。仲間でいちばんの腕っ節だったようだ。

女はそいつらを見据えると、右手と左手の指輪同士をガチンと打ち合わせる。

「あんたらも、ヘヴンに昇ってみる……?」

「滅相も!」「いけません!」

残党どもはボスを助けることも忘れ、暴力の現場に背を向け逃げていく。

女は足元に舞って落ちた「督促状」と書かれた紙を拾い上げると、そいつで拳の血しぶきを拭い取って丸めて捨てた。

「ふん、話にもならないわね。山猿の大将にも劣る」

女が代わりに手に取ったのは、ゴロツキのボスが手放した巾着袋だ。それを見た瘦せぎすが、四つん這いで女にすり寄った。まあ見りゃわかるだろうが、こいつが持ち主というわけさ。

「あ、ありがとうございます、ありがとうございます。それは今日の大事な稼ぎなんで」

「ふざけんなてめーっ!」「ぎゃーっ!」

女が伸びた手を踏みつける。瘦せぎすが痛みにもその場を転げ回った。

「このはした金は、用心棒の報酬としていただいてくわ」「へ」

瘦せぎすは裏返ったところで、ぴたりと動きを止める。そいつは女が財布を持って、ヤツに背を向けるまで続いた。口から泡を吐き出しながら、虫の物真似をもう一度。

「そ、そんなものを頼んだ覚えは……」

「るっせーぞこるあー!」「ぎゃーっ!」

さらに無慈悲なヤクザキック! 瘦せぎすが理不尽にもう一度地面を転がる。

「世の中には、ただで身を守ってもらえるような甘い話なんてないのよ! 呪うならしょもないヤクザ者に捕まった自分の無用心を呪え!」

「そんな殺生なあ」

これじゃあカツアゲの相手が、ゴロツキからこの女に変わったただけだ。いやはや世知辛い。

幻想郷は捨てる神ばかりか? しかし女は瘦せぎすを無視して、そのまま路地を出ていった。

いや、出ていこうとして、立ち止まった。うつむいて、バサバサと羽織ったコートは何度か払うと、おもむろにそいつを脱いで捨てる。コートの下は白いノースリーブのワンピースで、背中だけを見たら意外と質素だ。

「やーねえ、一張羅が汚い血と胃液で汚れちゃった。新しいの買い直そうっと」

瘦せぎすは口を半開きにして、女の奇妙な振る舞いを見守る。しかし、そいつが声をかける前に女はもう一つつぶやいた。

「こいつは独り言だけだわ、わりといい布使ってるのよね。古着屋にでも持って行って売れば、それなりにいい値段にはなるかしらねえ」

そう言っただけで女は今度こそ路地を出ていった。瘦せぎすと、それなりにいい値段するコートを

その場に置いたままだな。

§

「疫病神に売るもんなんぞない、帰れ」

でっぴりした呉服屋の主人は、青筋を立てて女にそんなことを言う。周りで働く奉公人は、無表情で台帳を眺めたり広げた反物を巻き取ったりと素知らぬ振りだ。

「ちゃんとお金はあるわよ？ そんな邪険にしくたつていいじゃない」

「どうせそこいらの有象無象から奪い取った金じゃろうが。そんなもので肥え太った輩が袖を通す服など、この店には置いとらんと言うておる」

女は腰に手を当て、頬を膨らました。

「まるで見てきたみたいに言うのね（合ってるがな）。そんな具合に客を選び好みしておいて、よくもまあ店の経営が成り立つものだわ」

「案ずるには及ばんよ。この店では信用の置ける客と誠心誠意の取り引きをさせていただいておる。貴様はそうではないというだけのことじゃ」

店中に聞こえる程度の舌打ちを響かせ、足を踏み鳴らす。

「わかったわよ、もう。服屋は別にここだけじゃないしー」

「貴様がごとき低俗な輩は、どこに行っても同じよ。おい、何をもたもたしておる。さつさと塩を持ってこんか！ 塩！」

奉公人たちがいそいそと動き出す。女はそいつを無視すると「栄屋さかや」の屋号が書かれた暖簾をくぐって外に出た。肩を怒らせ、ぷりぷり音が鳴りそうな勢いで通りを歩く。

「別に、悔しくなんかないわよ。嫌われるのには慣れてるしー」

毒づく女。そこに意地の悪い北風が吹いて、ノースリーブの肩を大いに冷やした。

「へっぶち！」

およそオッサンくさいくしゃみを吐き出すと、女は自分の肩を抱く。

「あー、あんまり薄着慣れしていないのも考えものだわー。年がら年中あのスタイルでよくもまあ、風邪引かないわよね、あいつは……」

歩く女の眉間に、みるみるしわが寄った。

「ふん」

そこで、ハンドバッグの中から粗末な巾着袋を取り出した。さつき瘦せぎすから取り上げたあれだ。ヤツはそいつの中身を確かめ、余計に顔を歪める。

「駄目だわこりゃ。こんなんので一日の稼ぎとかしみつたれた仕事してんだなー。もうなんほかカツアゲしないと割に合いやしない。あんまり気前良すぎるのもやつぱ駄目よねえ」

で、私はその後ろについていった。私は誰かって？ じきにわかるさ。

「ずいぶんとお優しいねえ、お姉ちゃん。服なんかくれてやらなきゃよかったのに」

女はゴミ溜めでも見るような目で私の姿を見た。さて、どんな格好に見えているのやら。

「何よクソガキ、さっきの見たの？ 見物料取るわよ」

「おあいにく。奪えるようなもんは持つちやいない。それにあんな腕っ節にもを言わせなくたって、いくらでも稼ぐあてくらいあるんじゃないのかい？」

女の歩調が速まった。どっこい、私も負けじとついていく。

「ずいぶん食いつくわねえ。人のやりかたにケチつけないでちょうだい。あんまり派手にやりたくない事情つてもんがあんよ。こっちにも」

「そうかなあ。実際のところ私には、あんたが無理してセーブしてるように見えるんだがね。あらがえない性に苦しんでるんじゃないのか？ なあ、最凶最悪の疫病神、依神女苑さんよ」

女こと、依神女苑が足を止める。私は数歩後ずさった。こっちに振り向く、鬼を殺しにいくみたいな面構え。

「テメエ、なんで私の名前を知っている」

「そりゃあ、知ってるともさ。だって散々教えてくれたじゃないか。いつときとはいえ同門の顔を忘れてくれるなんて、つれないなあ」

私は正体不明のタネを外して、女苑に一瞬だけ本来の姿を見せてやった。おなじみ黒いワンピースに左右非対称の翼、平安の大妖怪、封獣ぬえさまの姿をな。

案の定ヤツあ血相を変えて、ゴロツキの相手をしてたときみたく拳を作る。

「お前、命蓮寺みょうれんじの。私を連れ戻しに来たのね」

「落ち着け、別にそんなんじゃないからさ。むしろ白蓮びやくれんが頻繁に来る人里の中でノックアウト強盗をやつてるお前のほうこそ、相当凶太いぞ」

そいつを聞いた女苑の顔は、臨戦態勢からみるみる萎縮する。再び里通りを歩きだしたヤツの足取りは、少々たどたどしい。

「……カモにできそうな相手がここにしかないんだから、しょうがないじゃない」

「だがそのうち面が割れ、やすやすとカモれる相手も減ってくるだろう。さっきの呉服屋なんぞがいい例じゃないか。そうすりゃ余分に人間たちの財布の紐は固くなって、富を巻き上げる余地はなくなっていくぞ。お前自身もそいつに薄々感づいているんじゃないのか？ ああいうヤクザ者を相手にしてることば」

女苑の横に回り込んでみる。唇をびくびく震わせていた。おおかたビンゴだろう。

「どうだ、ものは相談だが……もう少し別の稼ぎ口を探してみないか？ 後ろ暗い金儲けよりマシなやりかたを紹介してやろう」

私を見る女苑は、中途半端に焼けた餅みたいな顔だった。

「……どういう風の吹き回し？」

「私はねえ、あんたを買ってんだよ。あの寺には、質素な生活に慣れない妖怪なんてごまんと

いる。みんな内心では、禁欲的な生活から抜け出したいと思ってるのさ」

「だが、実際逃げ出すやつはまれだ。寄らば大樹の陰ってやつでな。協調性のない妖怪でも、徒党を組んでいたほうが何かと都合がいいのさ。だがあんたは、そいつをよしとしなかった」

「だって、逆らえなかったんだもん、疫病神の性に。豪華なお食事に、贅沢なお洋服。それを定期的に摂取しないと、私が私じゃなくなっちゃうみたいな気分になっちゃって。あの場所に行ったら未来永劫それが手に入らないと思えた瞬間に、なんかもうそれに耐えられなくなってる……で、気がついたら寺を抜け出してたわ」

「寺で働く裏で悪事をなしてるやつだっているだろうに」

「奪った富を隠し通せると思う？ あの怪物僧侶から」

頓服を飲んだあとみたいな女苑の顔に、自分のを寄せた。

「では、さっきの話だ。どうだい、乗ってみるか？ 寺暮らしは耐えられない。元の疫病神に戻るの気が咎める。だったら、その間の落とし所を探っていくしかないんじゃないか」

ヤツは口をへの字に曲げて、しばらく私の顔をにらみつけていた。

「それって、体良く私を利用されるだけかもしれないわよねえ」

「もちろん、十割の満足を保証するとは言わない。あんたがこのままジリ貧生活を続けるならそれでもよし、この件はお流れとさせてもらう。だがなあ、やらずに後悔するよりやって後悔

したほうが、悔いも少ないって言うぞ？」

私はそこでいったん足を止めた。女苑はといえば数歩前に進んだところで、やっぱり止まる。「正直、こいつは私にとつてもただの暇つぶしでしかない。あんたが乗らないって言うのなら、私は別の暇つぶしを探しに戻るだけなんだ。じゃ、元気でやんなよ」

「ちょっと待った」

私の視界の中で、女苑の姿が景色ごと傾く。

「話くらいは聞かせなさいよ。聞いてから判断するくらいはいいでしょ？」

……乗ってくれると思ってた。というか、乗らなきゃこの話はここでおしまいなのだ。

「結構。興味を持っていただけで何よりだ」

女苑は私へ足早に詰め寄ると、襟首をつかみ上げた。ここはヤツのしたいようにされてやろう。「ただし。ろくでもない話だったら許さないから。毛も残らないレベルで財運奪ってやるから、その覚悟でもってプレゼンしなさいよ」

「当然、必ずや興味を持っていただけると思っているよ？ 寺暮らしの妖怪からどれだけ奪う運があるか知らんがな」

「その言葉、忘れんなよ」

女苑に手を解かせると、私は歩きだした。

「さて、ここじゃあ人目につく。格好のプランナーに引き合わせてやるからついてきなよ」

「何、あんた一人じゃないっての？」

「そりゃ、私自身は文無しだからなあ。白蓮の財布の堅牢さは、いやほど知ってるだろう？
コネと悪知恵で勝負する妖怪なんだよ、私はな」

§

完全憑依異変。

外来人・宇佐見童子が引き起こしたとされる都市伝説異変に、女苑とその姉、依神紫苑が便乗する形で引き起こした異変だ。幻想郷中から富を巻き上げるといふ清清しいほどクズい動機に反して、そいつは幻想郷全体を揺るがすクラスの異変にまで発展した。

私はその顛末を陰から見ていた。異変は当事者になるより巻き込まれた連中の右往左往するさまを観察していたほうが、断然に楽しいからな。そうして私は依神姉妹のことを知ったんだ。紫苑のほうは天界からやって来た天人にいたく惹かれたらしく、そのまま二人で空に消えた。残った女苑は更生の余地ありとして、聖白蓮がしばらく預かっていた。しかし、こっちも寺の暮らしに耐えられなくなり出て行っちゃまって今に至る。

私が女苑に興味を抱いたのは、命蓮寺を逃げ出し一人でやっていこうとするその気骨よりも、疫病神としてのヤツのありかただった。他人に取り憑いて、富を奪い取る疫病神。その字面の

恐ろしさに反し、女苑はきらびやかな衣装を身にまとい人心をたぶらかすことに腐心する。

なかなか、面白いやつだ。私は、姉と離れ命蓮寺からも離れて一人ぼっちになったこの女が、どんな顛末を迎えるのか見てみたかった。その行く末がケチなカツアゲ犯として世に埋もれるというのは、あまりにもつたいないじゃないか。

「ちよっと、プランナーとやらはどこにいるの。こんな殺風景な竹やぶに住んでるっての？」

女苑の声で我に返った。ヤツの言う通り、ここは竹やぶの中。全方位、どこを見回したって竹しか見えない。通称「迷いの竹林」の中に私らはいた。

「まあまあ。ここまで来たんだったら、最後まで付き合ってきなよ。ここは案内人がいないと帰ることすら、とてもままならないからな」

「賢明な判断だ」

私らのほかにもう一人、やたらと長い白髪をぶら下げた女が前を歩く。こいつは藤原妹紅、私が竹林の先導を頼んだやつだ。女苑にとっても因縁がある相手の一人ではある。

「しかしあんたが案内人とはねえ。なんか仕返しされるかと思っただわ」

「憑依バトルが隆盛だったころなら、そうしてたかもな。あれはなかなか楽しかったが、憑依禁止のお達しが出たなら仕方がない……：：：：そら、あそこが永遠亭だ」

竹林がいきなり開けて、平屋の雅な建物が姿を現した。あれが永遠亭、見かけによらず腕のいい医者を抱えていて、病気になった人間の駆け込み寺になっている。ただ辺鄙な場所にある

せいで、こうして案内人をつけなきゃとでもたどり着けないのが玉に瑕だ。

「さて確かに案内したが、中の連中を呼ぶかね？」

「何、それには及ばん。別に医者が目当てじゃないんでね」

妹紅は疫病神と鶴という珍奇な組み合わせを前にして首を傾げていたが、ここでお役御免だ。依頼人のプライバシーをみだりに侵さない程度にや、ヤツあ自分の仕事をわきまえていた。

妹紅が帰ったのを見計らって、あたりを見回す。

「ここにプランナーが？ 引きこもりの家みたいねえ」

「実際近いかな？ まあちよっと待ってろ」

門前に兎が何匹か。こいつらは竹林の原住民で、実質永遠亭のベットみたいな連中だった。私はそいつらに近づいていった。

「よう『お前らの』ご主人はどこにいる？ 教えてくれたら人參をやるぞ」

正体不明のタネをちらつかせると、何匹かが興味深げに寄ってくる。

「おいこら、ちよっと。不吉な物体でうちの子分を釣ろうとするな」

そこに、横から声がかかった。敷地を仕切る竹垣の脇に、頭の上に兎の耳を乗つけた小娘が一人、腕組みをして踏ん返り返っている。

「あんたも食うかい」

「食べないよ。まったく、誰かと思ったら里近くの寺に住み込んでいる鶴妖怪じゃないのよ。」

師匠に取り次いでもらいたいのか？」

「その必要はないね。まさにあんたに会いに来たんだからな」

小娘こと因幡いんぱてゐが、眉をしかめて自分を指差した。

「何、私？」

「紹介する。こいつが依神女苑、先日起こった異変の元凶で、疫病神だ」

女苑が瞬きして、そいつを見る。

「え、まさかとは思うけど、この子があんたの言うプランナー？」

「そんなに大それたものでもないけれどねー。なるほど、あんたがうちの鈴仙をハチャメチャフリーダムにした大元の原因か」

「不可抗力よ」

てゐは上から下まで女苑の姿を眺めた。

「ふむふむ、これが疫病神。珍しいパターンもあつたもんだね。それで？ この子を私に紹介して、何をしてもらいたいわけ」

「幻想郷きつての詐欺師の知恵を借りたい。こいつが異変を起こすことなくやっていけるのにおあつらえ向きの仕事を探してる」

二度三度、首を縦に振る。風もないのに周りの笹がザワザワ音を立てた気がした。

「……取り分は？」

「儲けの一割。もう一割は私がもらう。残り八割はこいつの取り分な」

指差された女苑が歯をむいた。

「マージン取る気満々かよ」

「仕事を紹介するんだから、それくらいの出費は受け入れなよ。またカツアゲに戻りたいってんなら、降りてもいいけどさ」

「わかったわよ。話聞いてから決めるわ」

てゐが顎をしゃくって、静かに笑う。

「んー、あるにはあるよ、この子に向いてる仕事。ただ、相応の儲けが出るかはこの子の頑張り次第かなあ。あと、私一人じゃ難しいから、協力者がほしいところかね」

「伝手は私のほうでなんとかしてみよう。ものにもよるがね」
女苑がしびれを切らし、地団駄を踏んだ。

「それで、何をやらされるっての。そろそろ教えてくれないじゃない？」
てゐはほくそ笑んで、女苑に近づいていった。

「では。依神女苑、あんたには……アイドルをやってもらう」

無表情な女苑の足元を、一匹の兎が通り過ぎる。

「アイドル!？」

「ステージに立って、歌って踊って、お客さんからその対価のお金をもらうの。疫病神として

富を巻き上げるよか、ずっと真つ当なやりかたであんたは満たされるってわけよ。どうだい？」
「私が……アイドル……?」

口元に手を当て、つま先を踏み鳴らす。私はそんな女苑を眺めて、てゐに耳打ちした。
（効果は抜群ですな?）

（あの下派手な身なりを見りゃいやでもわかる。ありゃ根本的に見せたがりだよ）
「でも」

女苑の声が内緒話に割り込んできた。

「私、歌とか歌ったことないし」

「鍛えろ。最初は誰だつて素人」

「バックバンドとかステージとか、どーすんのよ」

「そこはうまいことコネを頼るのよ。ねえ?」

脇腹をてゐにつつかれた。言われるまでもない。すでに私の頭の中では妖怪検索エンジンがフル稼働して、女苑をアイドルに担ぎ出すお膳立てを整え中だ。

「任しとけ。ちようどいいあてがある。まあ、口説いてみるさ」

「レッスンに宣伝活動、それからライブ。あんたにやってもらうことは多いよ。売れるかどうかはあんたの頑張り次第さ。どうだい、やってみるつもりはあるかね?」

女苑は横を向いて視線を泳がせる。しかし、回答はヤツの中でとつくに決まっていただろう。

「……私を焚きつけた以上、最後まで面倒見なさいよ」

こつちを向いた女苑の顔は、敵意を目にたぎらせ口は緩んでいた。

「そうじゃなきや許されないわ」

「無論。お前が根を上げて逃げ出したとなりや、話は別になるがな？」

女苑は一度目を閉じ、そして、開く。

「まずは何から始めたらいいか、教えてもらえる？」

§

私らは、てゐの案内で人里へ引き返した。道中の女苑は、とにかくかしましかった。

「それで、コネをあたるって何？ もしかして今をときめくプリズムリバーウィズHかしら？」

行くと比べたら、声のトーンがあからさまに高い。てゐは竹やぶを押しつつ、私にしか見えない角度で渋い笑顔を見せた。

「んー、請けてもらえるならこれとない相手なんだけどねー」

「やつらは生粋のプロ集団だぞ？ 素人が割って入る余地はない」

プリズムリバーウィズHといやあ楽器を操る騒霊（ヘルターガイスト）のプリズムリバー姉妹と、太鼓の付喪神の堀川雷鼓（ほりかわらいこ）とのバンドユニットで、人妖を問わず人気がある。

だが、こいつらにレッスンを依頼できない真つ当な理由というのが格の違い以外にもあった。てゐるが真顔に戻って、女苑を見る。

「あとあんた、あいつらのライブ客狙って金を巻き上げてたんだって？ 恨み買ってるかもね」
女苑の笑顔がびしっと固まる。そう、先の完全憑依異変でこいつらが取り憑いていたのが、まさにプリズムリバーウィズHライブの参加者だったのだ。

「……じゃあ誰に頼むってのよ」

視界が開けた。迷いの竹林が抜けた先には、幻想郷ののどかな景色が広がっている。

「まず鍛えにゃならんのは、お前のボーカリストとしての能力だろうな？ プリズムリバーは演奏家だから、そこいらの指導はできない。代わりに最近少々知名度が落ち気味で気軽に声をかけられる、うってつけの人材がいるんだなあ」

「どうやら私と考えることは同じみたいだねえ」

女苑が腕を組む。そいつをよそに、私とてゐるは顔を見合わせ、笑った。

「同時に言ってみるか？ セーので」

お互いを指差し、いっせいに言葉を発する。

「鳥獣伎楽だ」

私たちのすぐ近くにアダムスキーが舞い降りる。正体不明で未確認なうちの使い魔だ。

「今の時分なら、鰻屋台にいるところかしらねえ。さっそく行ってみようか」

「送ってつてやんよ。まあ乗りな」

「ちょっと、ちょっと待った」

私とてゐがUFOにまたがったところで、女苑に呼び止められた。

「あのパンクロッカーに頼むのー？　ただ怒鳴ってるだけじゃないのよ」

私はてゐともう一度顔を見合わせる。

「意外と馬鹿にできないぞ？　ああ見えて歌と音のスペシャリストだからな」

「私らあの子たちとは腐れ縁もあるから、頼みやすいんよ。どうしてもいやだつてんなら先が思いやられるから、私らは降りさせてもらうけど？」

女苑は口をとがらせた。

「うう、わかったわよ。それにしても不格好なアシよね。なんとかなんなの？」

「はた目にはでかい鳥程度にしか見えないから気にすんな。それに見ようによつちや、フェラーリにもベンツにもなるぞ」

そうしてUFOは私らに乗せて飛び立った。

目的地に着く前に、おさらいしておこう。鳥獣伎楽とは夜雀のミスティア・ローレライと、山彦の幽谷響子かそだきょうこによるバンドユニットだ。響子は命蓮寺の門徒でもあるので、プリズムリバーに比べたらずいぶん頼みやすい相手でもある。

屋台というのはミスティアがやってる八目鰻の屋台のことだ。これはこれで主に弱小妖怪の

溜まり場として人気があるが、もっぱら鳥獣伎楽の打ち合わせ場所として使われているようだ。それでその屋台にやってきたわけだ。森の中にぼつねんと建つ移動式屋台に空から近づいていくと、何か騒がしい気配がする。UFOをホバリングさせた。

「どしたの？ 早く着陸なさいよ」

「まあ待て。あの二人以外に誰かいるな。こんな時間じゃ客でもない」

「お二人さん、ちよいと静かに」

てゐが耳をそばだてている。私らもそいつに倣った。

「そんなこと言わないでさー、協力しておくれよ。病は出さないように努力するからさあ」

「いや、努力するしないの問題じゃなくてね……」

「私たちにだって、ブランディングってもんがあんのよー。あんたをうちに加えたらイメージダウンじゃ済まないってのよ」

声は全部で三つ。後ろ二つが響子とミスティアで、最初のが誰か別のの声だ。

意外にも、覚えがあった。

「どーしても駄目かい？」

「そもそも、ポーカリストは間に合ってるし。色目使っても駄目よー。諦めなさい」

「ちえー。まあ気が変わったら声かけておくれよ」

「かけないわよー」

暖簾が揺れて、三人目のそいつが顔を出した。裾を絞って歩きづらそうなスカートをはいたポニーテールの女は、やはり知ったヤツである。

「土蜘蛛じゃねーか……地上まで何しに来やがったんだ？」

「んー、永遠亭の飯のタネかい？　こんなとこまでウィルスをばらまきに來たって、あんまりメリットなんてないだろうに」

「ねー、何の話よ」

女苑がUFOを揺すった。

「あんまりいい感じがしないって話さ。ま、ちよいと話をしてみることにしよう……」

望まざる来客こと黒谷ヤマメの姿が、森の向こうに遠ざかる。それを見計らって私はUFOを下ろし、屋台の暖簾を押しつける。

案の定、中には鳥獣伎楽の二人がいた。調理スペースにミスティアが、カウンターに響子が座って、私を見る。

「おや、ぬえさんだ」

「邪魔するよ。今の蜘蛛は何だい」

二人は顔を見合わすと、大変に息の合ったため息を吐き出した。

「最近プリズムリバーがメンバー再編成で人気上げてるでしょー？　なんかそれに刺激されたみたいでさ。うちのメンバーとして雇われないかって言ってきたわけ」

「地底のアイドルだかなんだか知らないけどさー、テンション上げすぎてウイルスを客にばらまかれたらたまないっての」

「でも、あの様子じゃ諦めてないよねー」

ねー、と二人の相槌が見事にハモった。腐ってもコンビだなこいつら。

……だが、幸先悪い出だしになった。てゐに耳打ちする。

(タイムミング最悪だな。土蜘蛛の野郎め)

(ほかあたってみる?)

(あいにくほかにあてになる伝手がない。駄目元で頼んでみよう)

響子がこちらを覗き込んできた。限界だ。

「何ごちゃごちゃ話してるの?」

「実はな……」

事情をはな

「やだ」

「早っ! せめて説明をちゃんと聞くなり、時間経過を暗示する空行を挿れさせるなりしろよ」

「語りたがりなアマチュア小説家みたいなこと言ってんじゃないわよ」

「あれでしょ? この前の異変の元凶だった疫病神? 何されるかわかったもんじゃありません」

「ない。いくらぬえさんの頼みでも聞けないなあ」

ミステイアも響子も口をひん曲げている。うん、やっぱり折が合わなかった。

「まあそう言わずに。境内の掃除代わってやってもいいから」

「それ結局ぬえさんもサボって、あとで聖から一緒に怒られるパターンじゃん！ だいたい、そんな安い見返りでコーチ役なんか請けるわけにはいかないよ」

普段の素行が悪すぎた。ちよつとだけ反省しよう。

「ま、当然の結果よね。所詮は嫌われ者の扱いなんて、こんなもんだわ」

女苑がそっぽを向く。うむむ、まずいな。このまま心折れられたらつまらん結果に終わる。というわけで、ターゲットを変える。

「夜雀はどうよ」

「んー、響子が気乗りしないなら私もパス。だいたい、私たちだって練習の時間ほしいし？ 他所さまの問題に関わってる暇なんてないわ」

「話は変わりますがローレイさん」

ここで、てゐが口を開いた。ミステイアが羽をびくりとおっ立てる。

「な、何」

「八目鰻屋台経営のコンサルト料支払いが、ここんとこ滞ってますよねー。そろそろ耳揃えてお願いしたいんですけどー」

両手の人差し指を立てて、踊ってんだか考えてんだかよくわからん動きを始めた。

「な、何の話だったかしらー。もう忘れてしまったわー」

「都合よく鳥頭になってもらっちゃ困るんですけどー。思うに滞納気味になってきたのって、ローレライさんが鳥獣伎楽の活動始めてからなんですよねー」

ミステリアは青くなったり白くなったりすると、おもむろに響子の肩を叩く。

「……響子、このコーチ請けよう」

「変わり身早っ！ あんた店の売り上げ何に使っちゃったの」

「フライングVのローンが終わっとりません」

どこで買ったんだか、そんなもん。おおかた魔法の森の骨董品屋に、うまいこと言いくるめられたとかだろうが。

しかし、響子のほうが未だに頑なだった。

「とりあえずそっちは、もう少し待ってもらいなさい。こんなんでも実にならないコーチなんか請けてたら、そりゃもうズブズブよ」

あと一息か。私が響子説得用のカードを脳内で選んでいると別の影が動いた。

何をかくそう、女苑である。

「あーもう、まだるっこしいなあ、どいつもこいつも」

不意に採め事の輪に割り込むとハンドバッグを漁り、紙の束を取り出した。そしてそいつを屋台のカウンターに叩きつける。

私ら全員が、目を丸くしてそいつを見た。厚さ一センチほどある札束を。

ミステイアがどうにか首を動かして、女苑を捉える。

「あの、これは」

「レッスン料」

カラスの群れが連なって鳴く声が、遠くから聞こえた。

「は、は、ははは」

響子が札束から目を背ける。その顔には玉のような汗が浮かんでいた。

「何言ってるのかしら。私ら妖怪よ。人間が使うお金なんかじゃ、興味なんてこれっぽっちも」

「あのさー、響子さー」

ミステイアがゆっくりと顔を上げる。その顔にはやっぱり玉のような汗が浮かんでいた。

「この前さー、なんか言ってなかったっけ？ コスチューム新しくしたいとか、なんとかさ」

響子の手がわなわな震え始める。

「い、今その話するー？」

「ステージの準備するにしても宣伝打つにしても、わりと使い用ってあるのよねー。バンド活

動始めて本当、いやと言うほど思い知ったわー」

ミステイアが響子にはちこんばちこんウイंकを飛ばす。

「ぬぬぬぬぬ」

ついに響子がその場で頭を抱えて苦しみだした。やばい。見てて楽しい。

「駄目よ、駄目よ幽谷響子！ 在家信者とはいえ私も仏教の徒。こんな財欲にホイホイと屈するわけにはああああ」

絶叫とともに腕を振り上げ、そして、振り下ろす！

バァン、と周りに響き渡るほど強い音が鳴り響き、カウンターのお手元箱がガタガタ揺れる。そして、私らは見た。

札束をはつしと握りしめる。響子の右手を。

「レッスン料、確かにちょうどいしましたああああ！」

女苑は椅子の一つに腰掛け、ちとオーバーな動作で足を組んだ。

「それじゃあまあ、そういうことで、以後よろしく」

「仰せのままにいい！」

響子とミステリアが札束掲げて頭を下げる。私とてゐはそいつを肩を落として眺めた。

（ホイホイと屈してしまった……）

（マネーパワーに鳥獣伎楽が完全敗北だ……）

響子たちが血眼で札束のカウントを始めたが、まあしばらく置いておこう。私は煙草などを吹かし始めた女苑に寄り添い、肘でつついた。

「だいぶん乗り気になってきたじゃないか。手管で押し切るつもりだったのに」

「勘違いしないで。私は使いそびれてたはした金を消費しただけよ。だけどあんたたち、私にここまでやらせた以上は、覚悟できてるでしょうね？」

煙を吐き出しながら、女苑は逆八の字な目つきで私らを見上げる。

「地獄の底まで付き合ってもらわ。トンズラかまそうものなら、二人まとめてむしるからね。地の果てまで追い詰めて、ケツの毛も残らなくなるまでむしり尽くしてやるんだから」

「あらやだ、お下品」

私の軽口を女苑は無視した。カウンターに向きを変えると、ミスティアに声をかける。

「ところで。屋台はもうやってるのかしら？ 一杯やってくわ」

「あ、はい」

ミスティアが我に返った。即座にエプロンを身につけだすあたり、条件反射じみている。

「鰻の仕込みで少々お時間いただきますがー？」

「すぐに出せる乾き物とかあるでしょ？ それを先に出してよ」

「はいはい、ちょっとお待ちを……響子、ちょっと手伝ってくれる？」

「山彦使いが荒いわー」

響子も頭に三角巾を巻いた。バタバタと鰻や干物を取り出すのを横目に、女苑が私らを見る。

「あんたたちも飲んできなさいな。おごるから」

「お、いいのか？」

「私は健康志向なんでお酒はパスで」

派手に煙を吐き出す。

「しみつたれてるなあ。酒のない生き方なんて人生の半分は損してるわね」

「心配ないわよ。そのぶん人の倍以上は生きてんだから」

「ま、いいわ。ねえ店長、いちばん高いボトルを空けてちょうだい」

ミステイアが八目鰻から手を滑らせた。

「なんか調子狂うなあ。うちボトルキープはないすよお客さん」

代わりにミステイアが取り出したのは、湯飲みと焼酎の一升瓶だ。酒を注いだ湯飲みを受け取ると、女苑は何の迷いもなくそいつを一気におった。ヤツの顔面が潰れる。

「つかー、安くて悪酔いできそうな酒だなあ。ドンペリはないのか」

「んなハイソなもんはないっつら。希少でテンション上がる雀酒ならあるわよー」

「いいねえ。持ってたきなさい。あ、その前にもう一杯」

ペースの上がりかたが半端ないなこやつ。

ミステイアが屋台の裏手へと消える。それと入れ替わるみたいなタイミングで、屋台の外に新しい気配が現れた。ヤマメが戻ってきた……わけじゃあなかった。

「おや。今日はずいぶんと早い時間からやつてるみたいだねえ」

気っ風のいい声とともに暖簾から顔を出したのは、長い髪を二つに分けた女であった。左の

手首に枷じみ腕輪をはめており、そこにつながつた鎖は腕に抱えた首なしの琵琶に続く。

そこにミスティアが、竹筒を抱えて戻ってきた。

「あ、姐さんらっしやい。ごめんねー今日ちよつと混雑してて。八橋さんも来てるよね？」

「当然いるよ。やつほー」

と、さらにシヨートカットの女が顔を出す。この二人の声を聞いて、顔を上げたのが女苑だ。

「八橋？ 姐さん？」

ぐいと新客二人を見ると口に手を当て、無遠慮に指差した。

「女子二楽坊だ！」^{じょしにがくぼう}「いかにも」

なるほどこいつらが、女子二楽坊。九十九弁々、九十九八橋の姉妹による弦楽ユニットだ。

ブリズムリバー再編の間隙を埋める形でデビューして、いつとき話題をさらった。

その九十九姉妹とミスティアを、女苑が口を半開きにしたまま交互に指差す。

ミスティアが鼻息を荒らげた。

「失礼だねあんた。ミュージシャン同士の付き合いくらいあるわよー」

私は一計を案じて女苑の肩を叩いた。こういう場所での巡り合わせもなんかの縁だ。

「ちゃんと挨拶しといたほうがいいぞ？ 先輩になるかもしれないだからな」

「何、後輩？ あなたが？」

八橋が目をキラキラさせながら、女苑の顔を覗き込んだ。私から言わせればこいつら妖怪と

しちや若輩もいとこだからな。後輩という言葉は魅力的なんだろう。

一方女苑は先輩と聞くや唇を引き締め、身なりを正して九十九姉妹に向き直る。

「ど、どどどどーも、はじめまして。依神女苑です」

「どうも、九十九弁々だよ」「八橋です」「こらじゃ見ない顔だけど、あんた何者だい？」

「疫病神よ、姐さん。プリズムリバーのライブを荒らした連中の片割れ」

一瞬、女苑がミステリアをにらむ。

「い、今は大人しいので。ほほほ」

「はー、話にや聞いてるよ。ライブ会場で起こる、謎の大散財事件ってやつだ。それが私らの後輩に？ 償い行脚でも始めるつもりかね？」

肩幅を狭める女苑。

「まあ、なんか成り行きというか」

「まだまだ修行中よー。というか修行始めてすらないから。これから歌いかたを仕込むの」

「外野、黙っててちょうだい」

ミステリアに牙をむいた。弁々がそんな女苑に上から下まで目線を走らせる。

「そう、まだ駆け出しか。なるほど、見た目は悪くない。歌はこれからというけどあんた、好きな音楽とかあるのかね」

「うーん、好きな音楽……」

女苑はしばし口に手を当てて黙り込んだ。炭に火が入ってパチパチ焼ける音がする。

「……プリズムリバーみたいな音楽に触れたのはつい最近ね。その前は、せいぜい戯れに口ずさむ程度だったわ」

「例えば、どんな？」

ドスン、とミステイアが目打ちで八目鰻の息の根を止めている。

「うーん、童謡……とか？」

「うん、それでもいいさ。ちょっとここで一つ披露してみようか」

「へ？」

女苑が顎を落とす。弁々が首なし琵琶を抱え直すと、その上をひゆるりと妖力の弦が走った。「私たちは楽器の付喪神で、道具のときは奏でられ、人身のときは奏でと、今までやってきた。だからこいつがもう、当たり前になっちまってるんだけどねえ。だけどころこういう物事ってのは、好きでないとやってらんないものだと思うわけさ」

「え、いや、あの。今、ここで？」

「今、ここで」

指を弦に沿わせて、にっこり笑う。べれん、と琵琶が強い音を鳴らした。

八橋が横から顔を出して、クスクス声を漏らす。

「突発オーデイションだあ。姉さんの判定は厳しいわよ。妹にすら容赦ないから」

「八橋、あんまり脅かすもんじゃないよ。まあ、肩の力を抜きな。駄目出しをしようってものじゃない。ちよいと今の立ち位置を確かめさせてあげようってだけさ。さて、童謡といつても何がいだろうね？ 鳥の歌か花の歌か……今の時分なら桜もいいねえ」

女苑が手を出しあぐねている。そこへてゐがするりと近づいていった。

「言っただろう、最初は誰だって素人。ここで怖気づいて逃げ出すようじゃ、やっとなんよ」
「だ、だだだ、誰が逃げるって」

「いいねえ、その意気だ。今のまんまをぶちかましてやんな」

唾を飲み込んだ。弁々はそいつを眺めて笑うと、琵琶を改めてかき鳴らす。

「それじゃ、今宵は特別弦奏ライブだ。気後れせずについておいで？」

べん、べん、べれん、と前奏を鳴らす。すると女苑の顔が見る間に真っ赤に染まりだした。

「ほら、肩の力抜きな。別に下手くそでもどうもしゃしないって」

「うううううう」

おまけに、風船みたいに膨れ始めやがった。このまま破裂しそうな勢いだな。

「そろそろ歌に入るよ、そらそら。三、二、一」

「うううううううううううう！」

歯を食いしばり、目をつむって、両の拳を握りしめ、そして、歌い出した。

もとえ、叫んだ。

ほげええええええええええええええええ

日暮れ時の森に、鳥が逃げ出すレベルの罵声が響き渡った。

§

暖簾が揺れて、九十九姉妹が顔を出す。私はその背中を追って身を乗り出した。

「迷惑じゃなかったかい？」

「いいさ。たまにはこういう余興も楽しいもんだ」

弁々が、あっけらかんとした笑顔で言った。暖簾の内側に目を向けてみりや、カウンターに突っ伏する女苑の姿がある。うわ言みたいなことをブツブツ言いながら、起きる様子はない。

「駄目だな、本人完全に潰れちまつてる。きちんと謝りゃいいものを」

「構うこたあない、よくある話さ。あんたその子のマネージャーって立ち位置でいいのかね？」
ん？ となつて私は自分を指差した。九十九姉妹と向かい合つてんのは、今んとこ私だけだ。

「マネージャー、かねえ？ ただの賑やかしのようない気もしいではない」

「ま、どっちでもいいよ。起きたら伝えといてもらえるかい？ ただ音を出すっていうのと、

歌うつてのはだいぶん違う。あの子が学ばなきゃならないのは、まずそこからかね」

「要は相当な努力を要す、つてことよ」

「八橋、あんたは黙っておいで」

弁々が舌を出す八橋を、自身の背後に追いやった。

「私らは元楽器だからかねえ、独特の感覚かもしれないが……喉も気を通してその加減で音を出す、一種の楽器と言えるよ。ただ力任せに息をブーブー吹き込んだって、いい音を奏でちゃくれない。まずはそいつの上手な鳴らしかたを、自分自身によく叩き込むべきだよ」

「伝えておこう」

「あと、楽器は繊細さ。手入れは怠っちゃいけないね。酒と煙草はほどほどにするようにとも伝えといてくれると、よりよいかもしれないねえ」

改めて女苑の様子を見る。当然ながら、動き出す気配はない。

「聞いてくれるかどうかはわからんが、まあやってみよう」

「ころ合いを見計らつて、また遊びに来るよ。なんだかんだで芸道を志すのが幻想郷に増えたら嬉しいもんだ。次来るときまでに歌がより好きになっていてくれると、なおいいねえ」

九十九姉妹はそう言い残して帰っていった。あいづらどこ住んでんのかね。

カウンターに戻ると、女苑の反対側に、てるが座つてるのが目についた。竹筒に満たされた雀酒を、啄ばむように飲んでゐる。

「酒は飲まないんじゃないのかい？」

「程度を守れば酒は薬にもなるのよ」

「さつきは断つたくせに」

「まともにこいつに付き合ってたら、何杯飲まされるかわかったもんじゃないでしょ？」

「うー」

言葉にならん声を上げながら、女苑がカウンターの上で寝返りを打った。顔を真っ赤にしてよだれを垂れ流すその様子は、これからアイドルになるやつにはとうてい見えない。

「こんな調子じゃ先が思いやられるな。だが言いだしっぺの手前、こいつをどうにか独り立ちさせにやらん。時間はかかるだろうが」

「まー稼がせてもらえらるなら私は構わないだけどー。腑に落ちないこともあるのよね」

竹筒がカウンターの上でコトリと音を立てる。てゐは目を細めて私のほうを見た。

「なんでまたそいつを働かせようと思つたわけ？ 平安の大妖怪の酔狂ってやつ？」

「……千年ばかり妖怪やってると、どうでもいい知見が溜まる。疫病神って概念もその一つだ」

湯飲みに残った安酒で唇を湿らせる。

「こいつの姉貴、依神紫苑を見たことがあるかい？ あいつは実にわかりやすい貧乏神だった。つぎはぎだらけの服を着て、汚ならしくだらしく誰がどう見ても貧乏神だとわかるやつだ」

「うーん、姉さん」

あんまりにもあんまりなタイミングで女苑の声が聞こえたものだから、一瞬心臓が縮んだ。

「……姉さんはもうー本当にいいー、私がいなくて駄目なんだからあー」

が、寝言だった。

「……だが、こいつは違う。取り憑いたやつから富を奪い財運を奪い、抜け殻にする。まあその状態も病気と言えることあ言えるんだが。こいつ自身がおよそ疫病神らしくない」

「なるほど？ 病気をばらまくだけなら、さっきの土蜘蛛のほうが疫病神に近いねえ、確かに」
「んで、ちよいとお宇佐さんの見識を聞きたくなったわけだ。こいつはどう疫病神なのかって
てゐは肩を揺らしながら、竹筒にわずか残った雀酒の液面を回す。

「あまり竹林に引きこもってるだけの兎を買いかぶらないほうがいいと思うけどねえ」

「謙遜すんなよ。あんた私らよりずっと前から妖怪やってんだらうに」

神代の時代から生きてる因幡の素兎は、八目鰻の竹串をいじり始めた。

「そうねえ……疫病神というからには、やっぱり疫病神たる所以があるんだらうさ。そいつを
確かめるには、やっぱり誰かが病気になるのを確かめる以外にない。と、いうか」

口元を歪め、こちらを見る。

「病人は出るよ、間違いない。このままアイドル業を女苑に続けさせたら、きっと誰かが病気になるだらう。近い将来にね」

口ウソク明かりのいたずらか、私を見るてゐの笑顔にはずいぶん影が差している。

「そいつは経験則的ななんかかい？」

「予言だよ。百発百中、大汝^{オオナムチ}牽^ム遅^チさまのころから外した試しはない」

「そいつは疫病神が、自分の能力^{ちから}を使つてつてことか？」

「どうだかねえ。予言つてのは後付けでどうでも解釈できるもんさ。病人が出れば少なくとも永遠^{ウヱン}亭^{テイ}は潤う。お師匠さまはいい顔をしないでろうけれどね」

私はてゐの顔色をうかがつたまま、皿に残つた串に手をつけた。八目鰻を口でくわえ取り、タレで味のついたそいつを噛み碎き、飲み下す。久しぶりに食うナマガサ物が胃袋に染みだ。

「……そいつは里人の誰かがこいつに関係なく熱出してぶっ倒れたとしても、適当な理由をつけて疫病神の仕業つてことになりや予言は成立しちまうぞ」

「むしろその程度で済んでくれたほうが幸せかもねえ……まかり間違つてこの子が本当に病をまき始めたら、私や真つ先に逃げるよ？」

酒の残りで名残惜しくも舌に残つた味覚を洗い流す。

「そいつあ、私もだな。だけどそいつはないと踏んだからアイドルなんて勧めたんだらう？
こいつあ私にとつても単なる戯れ、実験なんだ」

「ねえ、姉さんてばあー、どこ行つちやつたのよー」

女苑の寝言が相変わらず続いている。屋台の主人はといえば一仕事終えた片手間に調理台に肘をついて、私たちのやり取りを表情なく眺めていた。

夜が更けて、闇の妖怪が獲物を探し徘徊する時間になった。

いつまで経っても女苑が潰れて動かんものだから、結局叩き起こして私が人里まで連れていくことにした。どうせ帰り道が同じなので、ついで見たいなもんだ。

「お前、普段はどこに住んでんだよ」

女苑は私に肩を担がれ、引かれるがままになっている。

「んー？ パパのところとかかしらー。あてがなければ適当な木賃宿に行くわ」

「そのパパが何人いるんだオメー。ちったあ命蓮寺を頼れ」

命蓮寺の言葉を聞くや、女苑は私の腕をすり抜けて千鳥足で私から距離をとった。

「今度こそ白蓮に座敷牢へ幽閉されちゃうから勘弁だわー。あ、お見送りはこの辺でいいわ。

もう一人で歩けるから」

人里に入る門に向けて、蛇みたいな道筋を描きながらそう強がる。

「明日からレッスンが始まんذار。わかってるたあ思うが、始める前から逃げてくれるなよ」

「私、ただ豆腐メンタルだと思われてんのかしらね……大丈夫よ、初日くらいはちゃんと行ってやるから安心しなさい」

「そこは二日目以降の気合いも見せてほしいんだがな？」

ヤツが通用門から里に入るのを待ってから私も引き返すことにした。……人里のどっかで行き倒れるかどうかは、考えないようにしておく。

命蓮寺は人里から近い「小信貴山」の上にある……正式名じゃないが、寺の者が勝手にそう呼んでいる……。長い石段を登っていくと、張子の虎を脇に控えさせた大門に行き当たった。

門を乗り越え、音を殺して境内に降り立つ。帰ってきたのが夜更けだったこともあり、中は静まり返っていた。目指すのは多くの妖怪が寝起きする宿坊だ。

そちらのほうも、すでに消灯が終わり真っ暗だった。まー私らに夜の暗さなど関係ないがな。だがしかし、廊下に面した一室だけ明かりのついてる障子が見える。

……実に悪い予感がするな？

誰の部屋か知る以前の問題として、命蓮寺の消灯時間はクソ早いのだ。それをブッチできる権限のあるヤツなんて、寺ではほんの一握り。

そんなわけで、全力回避だ。障子戸の前を抜き足差し足で通り抜けようとする。

「ぬえ」

駄目でした。

「……あい」

障子を開ける。白蓮は部屋の片隅に文机を置いて、経本を広げたまま私を見上げていた。

「あまり夜遊びをするものではありませんよ。檀家の目にも止まりますので」

白蓮は、すん、と鼻を鳴らす。こういうチェックは本当、姑かってレベルできつい。

「もしかして、お酒を飲んだかしら？」

「の、飲まされたんだ。断りきれねえ付き合い酒なんてものもある」

「そういうものは毅然と断らないと駄目ですよ？」

「気をつけます」

「あなたの気をつけるはまるであてにならないのだけれど……とところで」

はい、いやな予感再来。

「まだなんかあるの」

「外に出ていたのなら、女苑を見かけなかった？」

予感的中。もーいつも鈍いくせに、なんでこんなときだけムツチャクチャ鋭いのこの尼。

どうしようかな、どこまで感づいてるかな。正直にカミングアウトしたらキレないかな？

ひとまずとぼけて出方を探る。この間カンマ一秒。

「女苑か。さて、見たかな。あいつはいつもド派手な格好をしているから、見かけりやすぐにわかりそうなもんだが。もしかして聖、まだあいつの更生に未練が残ってるのか？」

頬に手を当て、経本に目を落とす。夜の闇に包まれた宿坊は、死んだように静かだった。

「止め置きなかったことはいささか精進不足だったと思うけれど、それより気がかりなのは

女苑がまた元の生活に戻っていないかどうかよ。幸いまだ悪い噂は聞いていないけれど」

「おおかた大人しくしているんじゃないか？ 貧乏神の姉もいないけりゃ、もう大規模な異変を起こす余地もない」

「私が心配しているのはむしろ、お姉さんがいなくなった今だからこそよ」

みしり、とかすかに畳が音を立てた。

「あの姉妹は昔から、かなり仲がよかったのだと思うわ。女苑はお姉さんのことを常日頃から役立たず呼ばわりをしてなじってはいたけれど、絶対に突き放そうとはしなかったわ。そんな二人が今や離れ離れで、まして女苑には同じ目線で語らえる相手がいらないのよ」

経本に、危うく爪を立てそうになっているのが見て取れた。私からしたら、そこまで深刻なことだろうかと思わんでもないのだが。

「じゃあ聖は、疫病神を連れ戻したいのかい？」

「いえ。強引に止め置いたところで、同じことの繰り返しになるでしょうね」

経本を閉じて、私を見上げる。

「でも、あなたがもしも女苑に会うことがあったら伝えておいてほしいの。戻りたくなったらいつでも戻ってくるようにと。命蓮寺の宿坊はいつでも空けておくからと」

「会うことがあればな？」

「引き止めてごめんさいね。明日に響くから早く寝なさい」

「ああ、お休み聖」

言って私は白蓮の部屋を出た。

……しかし悪いがなあ、白蓮。女苑は命蓮寺の名前を出しただけで酔いを冷ます程度には、寺のことを忌避してゐる節があるぞ。

それにしても最近の白蓮は、かなりセンチティブになっているな。やつぱり女苑と会ったことも、感づかれてゐるのではなからうか？

最近の白蓮ときたらあんな感じに夜遅くまで物思いにふけるようになったり、感覚が過剰に鋭敏になったりしてゐる。ああなったのは、まさに女苑が命蓮寺を逃げ出したあとのことだ。

……なんだよ、何ニヤニヤしてやがる。別に白蓮を氣遣つたわけじゃない。

女苑に声をかけたのは、純粹な興味。そのついでに、元の微妙に間が抜けた白蓮に戻つてくれたほうが、もうちよつと寺の空気がよくなると思つただけだ。

そんだけだからな!?

2nd Stage

幻想っ娘は宵越しの銭を持たない

命蓮寺の朝は早い。

虎の刻には早起き勢の手により布団から叩き出され、寺の掃除、朝食の準備、洗濯、座禅と単調退屈な朝の勤行をこなす。もちろん私にはそれらを卒なくこなす敬虔さがまるでないので、適当なタイミングで正体不明のタネを使いダミーをこさえて寺を抜け出すのがお決まりだ。

小信貴山を降りて人里に向かうと、路傍の石に座り足をぶらぶらしているてるの姿があった。「ずいぶんとお早いお越しで」

「あんたが遅いだけよ。早寝早起きは健康の常道」
あくびを一つ。

「それはさておき、女苑は大丈夫かねえ？ 初日から欠席とかさすがにまずいよ」

「いちおう自分で歩く程度にはなってたよ。ここで別れたあとどうなったかは知らんが」

そんな話をしていけると、よく目立つシルクハットつきの影が大門に現れた。頭を押さえたままもっさりとは歩いてくるのを見る限り、とても胸をなで下ろす気にはなれんかったけどな。

「逃げ出してなくてまずは一安心ってところか」

「頭めっさ痛いけどね……」

二日酔いするほど深酒する妖怪ないし神ってどうなのよ？

「これから大変なんだから、ちったあコントロールしろ。女子二葉坊も喉を大事にしろってよ」
「できたらとうの昔にやってるわよ……散財は私のアイデンティティなのよ……」

難儀だな、疫病神の性ってやつは……。

「じゃあせめて金を別の方向性に使え。ヤケ酒や煙草、夜遊び以外にも使い道があるだろ？

これからは、特にな」

女苑は血色の悪い顔でそっぽを向いた。

「まあ、まあ、やってみるわ」

「頼りない返事だなあ。あいつらがどういうトレーニングをやるのかはわからんけど、せめて
きちんと言うことを聞いて……」

肩を指先でつつかれた。てゐである。

「あれ、見てみ？ 傑作よ」

含み笑いのてゐを不審に思い、正面を見た感想がこれだ。

「あいつら何か悪いもんでも食ったのか？」

八目鰻屋台の側に立ちはだかるミスティアと響子の姿は、愉快だった。

「遅い！ 待ちくたびれたわ」

二人してなぜか紺色のジャージに、サングラスといういでたちである……そして手には竹刀まで手にしていた。なめられないための配慮がなんかなのか。

「いったい何があった」

パシーン！ ミスティアの竹刀が唐突にうなりを上げる。

「レッスン料いただいてるからね。しっかりと料金ぶんの仕事はさせていただくわ」

「途中で投げ出すようなら（昨日の飲み代差っ引いた上で）代金突っ返してやるから、そのつもりでいるように」

腕組みして踏ん反り返る鳥獣伎楽。たじろぐほどの氣迫を感じる。

若干、空回りしてるようにも見えるけど。

「しかしあんたたち、そこまで形から入らなくても」

パシーン！ 女苑の足元で砂利が弾けた。

「『あんた』じゃねえ！ 我々のことは『先生』と呼べい！」

「は、はい、先生」

さすがの女苑も空気を讀んだ。まあ大人しく従つとくのが妥当だろうな。

「よろしい。まずは発声の訓練からだ！ まずはこの界限を一周走る！ 飛ぶのは禁止！」

「うわ体育会系！ 歌と全然関係ないじゃ」

「口答えをするなー！」パシーン！「ひいっ！」

響子が文字通りに、吠える。

「関係大あり。声を出すのも呼吸ひいては筋肉だ！　まずは有酸素運動をしっかりとやって、横隔膜を大きく動かせるようにする下地を作る！」

「いやでもそういうのって、幻想存在かたしがやってもあんまり意味ないんじゃ」

「細かいことは気にすんな！」

「ほら、まずは着替えろ。そんなジャラジャラしたもの振り回しながら走るつもりか？」
間髪入れずにミステリアが女苑にジャージを差し出す。二人が着てるのと同じやつだ。

「うわ、芋くせえ！」

「体作りにリッチは必要ねえ！　文句言ってる暇があったらとっとと着替える！」

女苑が竹刀に追い立てられて、屋台の裏へと消える。そんな鳥獣伎楽の剣幕を、私らは口をあんぐり開けてただ見守っていた。

「……わりと上手にコーチ役を務められそうな気がしてきたな？」

「あの子らなりに考えたんだろうさ。お世辞にも疫病神と同格とはいえないからねえ」

あの様子なら、しばらくは真面目にレッスンを受けることだろう。もって一刻……その間は手持ち無沙汰となるか。そこで、はたと思いついたことがある。

「次は踊りのレッスンコーチがいる、か。適任がいるな。ちよっと口説きに行ってくるわ」
てゐるがバタバタやってくる屋台のほうに親指を向ける。

「あつちはどうするー?」

「とりあえず逃げ出さないように見張つといてくれれば。あんまり理不尽なことを鳥獣伎楽がやりだすようなら、止めてやってくれよ」

「オッケー」

§

知り合いで踊りの心得がある者といやあ暗黒能楽の大家、面靈氣の秦はたのころしかおるまい。あいつは仏教の徒じゃないが、女苑と同様に白蓮が目をかけている妖怪の一人である。

年がら年中どこかで舞を披露しているので、珍しく人間に認知されていた。その甲斐あつて人里の外れに庵を持ち、あらゆる感情を司る六六の面とともに静かな暮らしを送っている。

そんなわけで人里を再び訪れた。おっと、正体不明のタネを身に憑けて人間の振りをせねば。こいつを忘れると大騒ぎになる上にアイデンティティの危機だ。

さつそくこころの庵を訪ねていくと、何やら話し合う声が聞こえた。先客である。しかも、妖気をピリリと感じた。気楽に会っていい相手じゃなさそうだ。

まずは物陰になりを潜め、話が終わるのを待ち構える。

しばらくして、木戸がずれる音が聞こえた。その来客らしきやつが、玄関から顔を出す。

「じゃ、またいい面が見つかったら寄らせてもらおうわ」

「よろしく願います」

フードをかぶって出てくる小柄な人影が一つ。コートから背負ってる巨大なりユックから、水色ずくめだ。顔を隠してはいるが、間違いなく河童の河城かわしろにとりだろう。ヤツとこころは、憑依異変のときにつるんで完全憑依の自動化を目指していた。

私はとりの妖気が遠ざかるのを、正体不明に紛れて待ち構える。そこからようやく念には念を入れて、裏口に回り込み木窓をこじ開けた。

「へーい、元気か面霊気」

「うわっ、なんだお前」

こころは私を見るや、大口開けた大飛出の面を頭にかぶり両手を上げてのけぞった。

全くの無表情で。

「誰かと思えば、お寺に居候してる黒いやつか」

「ちゃんと覚えろな。実際黒いけど。お前に相談があつて来たんだよ」

かくかくしかじか、踊りの師匠を探してる件をこころに伝える。

「事情は理解した。私の能楽は、求められている舞踊とかなり毛色が異なるような気がする。

そんなのを教えても大丈夫なの」

「体捌きや体の動かしかたには通じるところがあるう。基本でいいからしつけてやってくれよ」

こころは目線が泳いだ猿の面をかぶって口元に指を寄せた。全くの無表情で。

「それはいいけれど……私もタダじゃ教えらんないよ。人に見せるのが目的の舞ならなおさら」
「出世払いでどうにかならんか」

真つ赤な般若の面をかぶって両腕を振り上げる。当然、全くの無表情で。

「ふざけんな、こちとら遊びじゃないんだよ」

「俳句かよ。てかお前、最近あの河童に口調が似てきてるぞ」

こころは目を伏せた乳母の面をかぶって……もういいって？

「実際、最近ちょっと支払いがきついよねー。にとりさんが、いろいろなお面を持ってきてくれるのはいんだけど」

さつき来てたのも、まあ、そういうことなんだろうな？

「お前それ、しょーもないもんも一緒につかまされてないかい？」

「そんな気もするけれど、いろいろな感情が表現できて楽しいし。そうだ、儲け話だったら、にとりさんに持っていったら？ 完全憑依がなしになって、新しい儲け口を探してるみたいだし」

「うーん、河童なあ」

格子越しに、こころが鉄仮面を寄せてくる。

「躊躇の感情に満たされてるわ。何か問題でも？」

「河童を儲け話にからませるのはいささか都合が悪い。あいつ単体なら怖くはないが、あいつ

のバックについてる連中を敵に回すと少々面倒なことになるからな」

「わからんでもない」

河童といや「妖怪の山」。幻想郷でも屈指のヤクザぶりを誇る妖怪組織だ。

「報酬の件はなんとかしてみよう。河童にこの件は、しばらく内緒にしといてくれ」

「いいけど、あいつら耳ざといから早々にばれるよ？」

別れ際のこのころの言葉が、耳に痛かった。あいつらの目を盗んで、どこまで動けることやら。

思えば、ほかにもクリアしないといかん問題は山ほどあるな。女苑のトレーニンクがうまく

行ったとて、どのようにデビューさせる？ 会場の手配は？ 衣装は？ 楽曲は？

お遊びで終わらせないためにも、どんどん外堀を埋めていく必要があるそうさ。

§

八目鰻屋台に戻ってくると、てゐは腕組みをして何かを見守っていた。幸いにして、留守にしている間に喧嘩別れなんてことはなかったみたいだ。

「様子は？」

「一通りトレーニンクが終わったところ。これから発声練習が始まるみたいよ」

屋台のそばに、三人がいた。ミステリアがエレキギターとアンプを引っ張り出して来ている

……電気？ 細かいことは気にするな。

ミステイアが弦を弾くと、スピーカーからビローンといった音が出てきた。女苑が両の拳を握りしめて、そいつを聞いている。響子が私らに背を向けて、そいつを見守る格好だ。

「はい、今のがCの音。ハミングでいいから、出してみ？」

「ウス」

妙に座った声で女苑が応じる。

「それじゃあ、いくよ。サンハイ」

「あーーーーー」

エレキの音に合わせて、女苑が声を出す。響子のロップイヤーが身じろぎするのが見えた。

「それじゃあ、響子、再生」

「あーーーーー」

響子の口から女苑と全く同じ声が出た。聞いた女苑の表情がみるみる歪む。

「聞いての通り。半音以上外れてんね、これ」

「うっそ。わざとやってないでしょうね!？」

響子が胸を張った。

「山彦の声帯模写なめんな。紛れもなくあんた自身の声を返したものよ」

「音感のズレって、自分自身じゃなかなか気づけないからねー。気持ち高いと思える声でもう

一回同じ音出してみな」

「うー、やってみる」

もう一度ミスティアがギターを鳴らす。

「あー……」 「今度は半音高い」

……意外とまともな指導してんのな。しかも響子の山彦スキルをうまく使ってやがる。

「それで、そっちの経過はどうだった？」

で、てゐの声によって我に帰った。

「ひとまず面霊気に声をかけてきたが、反応は渋いな。河童資本主義の悪影響を受けてやがる。

ヤツが喜びそうなネタ、なんかないかな」

「面霊気？ 最近出てきたやつよね。能舞台の場を斡旋したらどうかしら？ うちの姫さまが

興味ありそうだったし、他にもその手の古典芸能が好きそうな文化人は幻想郷に山ほどいるわ」

「いいねえ。そのセンでいってみるか。紹介料の代わりに女苑の稽古をつけてもらおう」

……何が竹林の引きこもりだか。面霊気と名前も出さない先から、このころのこともしつかり

調べがついてるじゃないか。ノータイムでソリューション出してきやがって。

まあ、それだから今回の悪だくみに誘ったんだけどな。

「河童で思い出したんだけど、一つ聞いてもいいかしら」

と、てゐが笑うでもなく、首を傾げて私を見る。

「なんで河童じゃなく私に声をかけたわけ？ この手の商売ならあいつらも得意そうじゃん」
「ぶっちゃけ抜け駆け駆けされたときに、告げ口しやすい保護者がいるからかな」

「おい」

まあ、それはジョークとして。

「河童どもがテキ屋業などをやっているのは、ひとえに自分らの発明品自慢が目的だからな。やつらに頼めば喜んで疫病神をアイドルに仕立てるための細工を用意するだろうが、やつらはその手段のために目的をたびたび忘れる。その点、あんたはプランナーとしての実績がある。

あの夜雀に鰻屋台を提案したのもあんたなんだろう？」

てゐは女苑たちのほうを向いて、へらへらと笑う。

「お褒めにあずかり光栄の至りと言いたいところだけど。単に私は儲けになりそうな話を出汁にして、連中の背中をちよいと押しに行ってるだけだし。それにあんたにやもう一人、頼れるおかたがいるんと違う？ 最近外からやってきた狸のさ」

……ああ、うん。そこ、突っ込みますか。

「今回に関してはヤツに頼めん……あれは最後の手段だ」

「やけにかたっ苦しいわね。友達なんじゃないの？」

「まあ、友達は友達だが金銭がからんだときのヤツはやばいんだ……あれが外で何をやってたか知ってるか？ あいつは、元金貸しだ。しかも友達利率が通じないタイプだ」

森の中に、ピローン、とエレキの音が響く。

「あー……確かに気安く頼めたもんじゃないわね」

「なもんで、できる限りは他のコネでどうにか節約せにゃならん。他にもいりようなものは、いろいろとあるしな」

ジャカジャン、と異質なエレキの音が聞こえた。なんか変化あったのかと思つて見てみると、女苑がこちらに歩いてくる。手には水が入った湯飲みが一つ。

「あー喉枯れる」

アクセサリ類を外し、腕をまくつたジャージの上下。ガニ股で座つて湯飲みの水をがぶ飲みする女苑の姿ときたら、もうすっかりオフタイムの気が抜けたお姉ちゃんだ。

「もう音を上げたか？」

「休憩よ。一日目からこんなんじゃさつそく心が折れそうだわー」

「寺の勤行とどっちがきついよ」

女苑は隈の浮いた目で遠くを眺めた。

「……あれは別の意味で苦行だわ。富を奪える要素がまるでないもの」

「なら、多少は望みのあるこつちは頑張れるかね」

残つたわずかな水を、湯飲みが逆さになるほど傾けて、飲む。

「期間にもよるわね……デビュ―まで何ヶ月くらいかかるもんかしら。その間の収入とかは？」

「んー、お前の努力次第？ 狭い幻想郷、アイドルと名乗るだけならすぐにも名乗り放題だが、きちんと歌って踊って客を集められるアイドルとなりゃ、相応に時間がいるわな」

「へビーね」

……空気が湿っぽくなった。話題を変えるか。

「ところでな。今踊りの師匠にもあたりをつけてんだ。そっちも稽古代を要求してる」

「あー」

「それでな。言いにくいんだが」

「最後」

ほそつと出てきた言葉を飲み込むのに、しばらく時間がいった。

「だから、あの札束で最後」

「もう少しケチって使えや！」

女苑が湯飲みをろくろ回ししながら、そっぽを向いた。

「つい勢いで……疫病神スピリットがケチを許さないのよう」

「ああもう、仕方ねえな……踊り以外にもいりようはあるんだが」

こころ相手にはてゐの案を使うとして、問題はその後。

「……いっそ鳥獣伎楽に掛け合って、一部返してもらうか」

「その必要はないわ」

ん？ と見ると、その鳥獣伎楽が腕組みで踏ん反り返っている。

「レッスン費は返せないけど（返『さ』ないじゃねーのかよ）新たな費用を捻出しつつ疫病神の修行にもなるいい方法があるわ。さつき響子と話してたんだけど、ちょうどいいわ」

「と、いうと？」

女苑が顔をしかめて二人を見上げた。

§

木立の狭間に見える空が赤く染まって、妖怪の時間が地上まで降りてくる。提灯に明かりが灯った八目鰻の屋台にも、妖怪どもがやってきた。

「みすちー、やってる？」

「あい。ちよっとカウンター塞がってんだわ。そこに出してるテーブル使ってもらえるー？」
見りゃー、確かに。屋台のそばにボロいクロスがかかったテーブルが一卓ある。高さも形も不揃いだが椅子も四脚ほど周りに並んでいた。

多少ガタがきてるが、座れんこともない。妖怪どもがテーブルに肩を並べる。

「珍しいね、テーブル席作るなんて。最近繁盛してんのー？」

「いらっしやーせー！」

そこに、ごんごんと人数ぶんの湯飲みが置かれた。

「うえ!？」

妖怪どもがそいつを見て目を丸くした。ワンピースの上からエプロンを身につけ、針みたいに細い目をして、笑いと怒りが混ぜこぜみだいになった顔の女苑が歯をむいた。

「ごちゅーもんなーにしやすいかー、決まったらまた来ますかー」

「こら、投げやりな声出すな！ 丁寧に対応しろ！」

「うえーい」

しごく愛想のない顔しながら、女苑は伝票を手を取った。妖怪の一人がミステリアに尋ねる。

「みすちー、こいつ、何?」

「アルバイト。接客やらせて対人メンタル鍛えさせてんの。どうぞこき使ってやって」

そのアルバイトが息を吐いて、ペンをぐるぐる回す。

「こいつ呼ばわりするあんたらも大概ね。それで、ご注文は?」

こき使え、というミステリアの言葉を聞くなり連中は口の横幅を広げて、キラキラした目を女苑に向ける。幻想郷の妖怪はよくも悪くも怖いもの知らずだ。

「あんた、知ってるよ。最近、異変を起こしたっていう疫病神だ。それがアルバイトだって?」

「注文つってんのに。世の中にはいろいろと世知辛い事情があるもんよー」

「接客業とか経験あんの?」

聞いて、女苑は自分の肩を抱き、腰をくねらせる。

「近いことならやったことあるわよー？ お金持ちのオジサンに色目使って、高いもの買ってもらうようなオ・シ・ゴ・ト。なんならここで擬似体験させてあげてもいいけどー？」

「屋台^{ツチ}を怪しい酒場にしようとするんじゃない！」

厨房からミステイアが罵声を飛ばす。私らはそいつを屋台のカウンターから眺めていた。

「なるほど、人前に出る接客業なら積極的に声を出してかにならんし、物怖じもせんようになる。夜雀にしちャー考えたじゃないか」

「一言余計。アルバイト料もきちんと出すから、そこからほかの費用も捻出させりゃいいわ」

「それはいいんだが、ちゃんとやってけんのかね」

てゐるが湯飲みを傾けて、私を見上げる。

「そこは問題ないっしょ。問題あったら長年疫病神やってないだろうし」

「疫病神は妖怪でもほだせるってのかい？」

§

星が見えるころにもなると、テーブルには飲んべえが四人ほどもたれかかっていた。女苑は新たな椅子を持ち出して座り、ヤツらにからまれるがままになっている。

「まったくうまくやってくれたわよねえ。私だつてうまいこと完全憑依異変に乗っかれば異変の主役になれたつてのよ。すごいわよ。巫女にいちばん最後に退治される系よ?」

「へええ、すごいわねえ。いったいどんな異変を起こしたのかしら?」

「そりゃあ、あれよ。まずは適当なやつに完全憑依するでしょー? それから……」
赤い顔で、淀んだ目をしばらく星空に向ける。

「……そう、とにかくすごいことになるんだから」

「へー、すごい。あ、体冷えてない? お替わり頼む?」

「焼酎もう一杯!」「あたしもビール!」

ミスティアが酒瓶を手にして、テーブルに向かう。

「あんたたちほどほかにしときなさいよー? っていうかさ女苑、あんたもちっとは」

「私この子たちに、とり憑いてませーん。この子たちが自発的にお金を使ってるだけですー」

「そういう問題じゃねーだろっ!」

私たちは結局その一部始終を、ただただ苦笑いしながら眺めていた。

「あいつとんでもねーな。聞き役に徹しておだてすかして、注文をむしり取ってやがる」

「もともとあいつは、そういう神さまだからねえ。自分をよく見せる手練手管に關してなら、右に出る者なしだわ。アイドルにも通じたるものがあると思わないかい?」

「始めっからそういう才能があるのを見込んで、アイドルになるのを勧めたわけか」

ふらりと暖簾が揺れる。

「興味深い話を小耳に挟みました」

顔を出したのは黒髪に赤い頭襟、手にはカメラを抱えた女。射命丸文。しゃめいまるあや 広域暴力団「妖怪の山」の最大派閥、天狗の先鋒にして新聞記者。

女苑の件に関しては、とりわけ繊細な扱いを要する相手だ。

「嗅覚の鋭いパパラッチが来やがった」

「昼間っからこの時間まで騒がしくしてりや、誰だって気がつきますよ。それで、アイドルと言いましたか？ プリズムリバーウィズHの会場で金品を巻き上げていた、あの最凶最悪姉妹の片割れをステージに立たせよう？」

……まあじきにやって来ることは想定の内だ。上手に利用する手立てを考えねば。

「取材費いたなくよ？」

「宣伝費と相殺ということではいかがでしょうか？」

「ええ加減な記事を書かないってんならな？」

「善処します」

てゐと目配せする。構わないよと片目で合図。賢明だな。

逃げ回ったところで、幻想郷は狭い。そして相手は、幻想郷最速の天狗。どのみち知れる。下手に情報を出し惜しみにして、憶測でトンデモ記事を書かれるほうがよっぽど迷惑だ。ここは

正直に、女苑をアイドルへと仕立てるに至った経緯を話すことにした。

「すると疫病神の更生が目的と？」

「そんな高尚なもんでもねえし。ただ手前の性分にあらがえなくって小さい異変に手え染めるやつは、幻想郷じゃわりと多いからな。いっそその性分を活かしてなんかやってみたらどうだと背中を押した結果が、今のところ功を奏しているというだけさ」

文は手帳に筆を走らせ、目を輝かせる。

「なるほど……これはどう転んでも面白そうです」

「そいつは失敗しても面白そうだって内心があからさまだな」

「あの娘の性質が性質ですからね。あれが財運を奪う神である限りは、常に周りから財を巻き上げる危険性を秘めている。暴走を始めたら、逃げ出すおつもり満々なのでは？」

「否定はしない。ま、本人が投げ出したらそれまでだから、過度の期待はせんこった」

「果たして、そんなつまらないオチになりますかねえ」

含み笑いを漏らして、後ろ手に暖簾を押した。

「どれ、私からも少々背中を押してあげるとしましょうか」

「あんまり機嫌を損ねてくれるなよ」

そんな声をかける側から、ヤツあするする女苑に近づいていく。

「どーも、清く正しい文々ぶんぶんまる。新聞です……」

「新聞記者が何用？」

聞くまでもなかるうに。問題は女苑あいつが新聞の取材なんて受けたがるかどうかだ。拒否したら拒否つたで文のストーキングが面倒なことになるんだらうなと思いつながら見ていると。

「……好きにすれば？」

あつさりと言つた新聞取材を受け入れたのだった。

§

最初の客が帰つたところでミスティアが不安を感じたのか、その日は早上がりをしていいということになったのだった。

「はい、これが今日の弁当」

ミスティアが手にひらつかせたものを見ると、女苑は口元を吊り下げる。

「薄っ！ ちつとは色つけてよー」

「確かに一人頭の売り上げは増えたけど、うちはナイトクラブじゃねえ！」

給料の入った封筒を受け取る。すると女苑はそいつをしげしげと眺め、続いて両手に持ったまま大幣みたいに天へ掲げた。

「はー……労働の重みだわ。寺暮らしやったら考えられなかったわね」

「よかったな？　ひとまずその金は、ダンスのレッスン料に回して……」

と、ここでなんだか女苑の様子がおかしいことに気がついた。封筒を見るヤツの目つきが、血の味を覚えた肉食獣のそれである。うっかりしてたら食い殺されそうな。

「……何企んでる？」

ごりごりごりごりと石臼みたいな音を立てて、半笑いの顔がこっち向いた。怖い。

「そう言えば思い出したんだけどー、私まだ、上着買ってなかったのよね」

「……それで？」

突然のつむじ風が、周りの木立をザワザワ揺らす。

……このパターン、どっかで見たことがある。

次の瞬間、横合いから飛んできたそいつを私はノールックではたき落とした。

おかげで、背を向けて走り出した女苑の動きにも反応できた。手にまとわりつく「督促状」

を払い落とし、短距離ランナーばりの猛ダッシュで森を抜ける女苑に、食らいつく。

「おいこら、待ちやがれ！　どこ行くつもりだ！」

「んー、ひとまず、人里！　ついてこなくていいわ！」

「よかねえよ！　何に使うためにバイトしたのかわかってんだろうな!？」

「わーってるって！　ちゃんと残す！　ちゃんと残すから大丈夫だって！」

「金がからんだてめーの『大丈夫』は信用ならねえ！」

あつという間に人里が見えてきた。八目鰻屋台からここまで、こんな近かったか？ 急いで正体不明のタネを呼び出す。

さておき、こいつあまざい。この女放っておくと、疫病神スピリットに任せて今日中に日当全額使い切っちゃうぞ。最悪、レッスン費用だけでも残させなければ。

「ていうか、この前の呉服屋でお前、門前払いを食らっていただろう？ また行ったところで同じことになるのが関の山だぞ」

とっさに出てきたこの一言が、運良く女苑の耳にも届いた。ブーツが火でも吹くんじゃないかって勢いで地面にブレーキ痕を残して、止まる。

「あー、栄屋のデブジジイね……やなこと思い出したわ」

「だから上着を買うのはもう少し金儲けできるようになってからだな……」

「待ってられないわよ、そんなの」

腕組みしてずかずか歩きだした。いいから待てよ。

「信用だかなんだか知らないけどねえ。あんな店使うヤツなんてろくでもない金持ちばかりに決まってるのよ。つまり、デブの眼鏡にかなわなかった人が使う服屋が別にあるってこと」

妙に冴えた推理力を発揮しやがって。まあもう日の沈んだこの時間帯、普通の店ならとつとと店じまいしてるに決まってる……

「ほら、ここなんていいんじゃない？」

普通じゃない店がありました。恨むぞ畜生。そこは確かに栄屋とも似た佇まいの呉服屋で、屋号は「尾井屋おのい」とあった。ちょうど一人、客らしき男が出ていくところである。

「閉店間近だぞ。断られるのがオチだ」

「入ってみなけりゃ、わかったもんじゃないわー」

お構いなしに店の中へと踏み込む。案の定、店の中では奉公人が畳に広げた反物などを片づけているところだった。それでも、新しい客の到着にヤツらは愛想よく微笑む。

「いらっしやいませ。お客さん、申し訳ありませんが本日店じまいです」

「ごめんなさいね。時間は取らせませんわ」

とたんに品のいい笑顔を作って、奉公人に頭を下げる。切り替えの速さは折り紙つきだな。「仕立て済みのものは扱っているかしら。軽く羽織れる上着を探しているのだけれど」

「上着のご用命でございますね？ 少々お待ちを……」

急いで奥へと引き下がり、他の奉公人まで集めてそそくさと動き出す。手慣れてやがるな。いやそうなそぶり一つ見せやしねえ。

「ほら、言ってみるもんでしょ？」

お前が得意げにするこつちやないだろうが。やむなし。服一着は買わせるしかあるまい。

「いいけど。調子に乗ってあまり高いものを買うんじゃないぞ」

「わかってるって……ん？」

女苑が不意に、動きを止めた。ヤツの視線を留めているのは、反物の棚の、そのまた一角である。帯かけにぶら下がったそいつは、女苑が羽織っていたのとよく似た薄紫色だった。

「む、むむむ」

「おいおいこらこら」

私が止めるのも関係なしに、ブーツを脱ぎ捨て畳に上がる。もはや目の輝きが、とびきりのおもちゃを見つけたときのガキのそれになっていた。

「好きな色だわ、これ」

「そちら春先に合わせた新色でございますよ」

横から声がかかった。初老の、ひよろりとした風貌の男が女苑を営業スマイルで見下ろしている。雰囲気と、着ている紺色の羽織から察するに、これが尾井屋の主人だろうか。

「……ちよっと合わせさしてもらってもいい？」

「よろしいですとも」

って、観察してる場合じゃなかった！ でかい買い物する気満々になりやがって！

「おいこら、オーダーメイド頼んでる余裕なぞなかるーが」

「試着だけ！ 試すだけならタダだから！ あらすみません、不躰なツレでして。ほほほ」

このアマ……！ 飛びかかりたい気分を押さえつけてると、新たな奉公人が何人か集まり、本当に合わせが始まっちゃった。広げた反物を体にまとわせ、着物のように見せるのだ。

さらに主人らが別の反物を何色か持つてくる。

「帯に合わせるならどの色がよろしゅうございますか」

「うーん紫が映える感じがいいわね。だったら……」

ここまで調子に乗られたら、さすがに黙っちゃられない。

「すっかり一着仕立てる気満々だが、お前今日の日当で足りんのか？」

帯を合わせつつ女苑が天井を見上げる。

「……分割払いというわけには」

「せめて安定した収入が入るまで止めておけ」

「ご希望ならお取り置きさせていただきますが」

こら尾井屋、いらんこと言うんじゃねえ。

「……私ら次も来るかわからん一見さんだぞ」

「ご来店なくば一月限りとさせていただけますが」

「いいわねえ、お願いできる？」

そして女苑がそいつに乗った。おいおい。

「ではそのように取りはからわせていただきます。お名前をいただいてもよろしいですか」

台帳を差し出された。女苑は自分のフルネームを、何のためらいもなく書き記す。

私はそいつを覗き込んだ……結局私まで畳に上がらされてんじゃねーか。

「……字い下手くそな、お前」

「ほっとけ」

「依神さま、ですな。確かにちようだいいたしました」

尾井屋は肅々と台帳を奉公人に引き渡した。しかしまあこの主人、あまりに飄々としている。表情一つ変えない。先の異変の、首謀者の名前くらいは聞いていてもおかしくないのだが。

と、そこにさつき既成品を頼んだ奉公人が、衣装盆を運んでようやく現れた。

「お服の準備が整いました」

「あら、悪いわね」

女苑の興味が衣装盆に向くのをよそに、尾井屋と奉公人たちは黙々と反物を片づけていく。その後女苑は、何着かの服を前にああでもないこうでもないと言って、一着のカーデイガンを買ってようやく尾井屋を出たのだった。

……どうにか一着で済ませた。疲れる。

「さあ、残りはレッスン費に回すぞ」

新しい上着の着心地を確かめていた女苑だったが、私のこの言葉を境にびたつと止まる。

すると、女苑は封筒に残った残金を数えだした。やがて、ごりごりごりと石臼みたいな音を立てて、半笑いの顔がこつち向く。もう駄目な予感しかしねえ。

「一杯くらいは大丈夫だと思わない？」

そいつを聞いた瞬間、私は女苑にタックルをかましにいつていた。しかしテイクダウンには至らない。それどころか女苑は腰に私の腕を巻き付けたまま、ズルズルと引きずりやがる。

「おめー昨日しこたま飲んだばかりだろう！ 一日も我慢できねーのか！」

「半日も飲まなきゃ立派なもんでしょーがっ！」

「そもそも酒と煙草は控えろっつてんだろーが！」

「疫病神にそんなの関係ねえ！」

この女、パワーがありすぎる。踏ん張りがきかん。このまま居酒屋まで持ってかれるのかと思えた瞬間、正面から救いかと思えるような罵声が飛んできた。

「やかましいわ、クソガキども！ 喧嘩なら脇道にそれてやらんかい！」

「あ、ども、すんませ……」

顔を上げたところで、女苑も固まってるのに気がついた。罵声の正体は往來の真ん中で踏ん反り返る太った男。後ろには提灯を掲げた付き人らしき男がいる。

そいつは女苑の顔を見るなり、吐き捨てるようにこんなことを言いやがった。

「何じゃ、誰かと思えば……懲りずに騙し取った金で遊び呆けておるのか」

私は無言で、女苑の腰に巻き付けた腕に再び力をこめる。

「あ!? フツーに働いて稼いだ金だし、別に遊び呆けちゃいねーし！」

これから遊び呆ける予定ではあったが、そんなことはどうでもいい。なるほど、私は人相を

初めて見たがこのクソ失礼なデブが栄屋か。

女苑がどんな顔してるかは、見なくともわかる。だがここは人里の往来、こんな人目につく場所で女苑を栄屋に飛びかからせるわけにはいかん。アイドル候補にんなことやらせられるか。「ふん、どうだかのう……何にせよ、往来で騒いでいるのには変わりないわい。貴様がごとき詐欺師同然の輩は、ドブ川ではしゃいでおるのが似合いよ」

「一発殴らせろ、てめー！　そこまで言われる筋合いはねーぞ！」

私は死力を尽くした。より低く腰を落とす、暴れそうになつて女苑の体を持ち上げたのだ。「おい、少し遠回りしていくぞ。まったく、疫病神と同じ道なぞ通つたら病がうつるわ」

付き人が頭を下げて栄屋に続くのだけがちよこつと見えたが、まあ基本的には抱えた女苑に腕を解かれるまいと必死だった。肘鉄を何発か食らいながら裏路地に引つ張っていく。

「馬鹿たれ！　ここで喧嘩なんぞしてみろ、アイドルデビューどころの話じゃねーぞ！」

「うるせー！　あんた妖怪でしょうに。あすこまで言われて腹立たないわけ？」

「見くびるな。ああいうのは私だって嫌いだ」

女苑を下ろし、素早く前に回り込む。

「だから、少々いたずらをしておいた。何が起こるかは正体不明だがな」

その後とある高級料亭で私が栄屋に憑けた正体不明のタネがちよつとした騒ぎを起こすことになるのだが、残念ながらそいつは話の本筋じゃあないのだ。

裏路地から出た女苑は栄屋を追うのを諦めちゃいたが、酒を飲むのは諦めてなかった。

「さー、気分悪いこともあったし、景気付けに飲むわ」

「懲りてねーなオメー。だいたい妖怪を毛嫌いしてる輩は、人里にわんさといろぞ」
「大丈夫よ。そういう連中と関係ないところで飲むから」

と、女苑が足を止めたのは一軒の居酒屋である。竹まいと場所には、覚えがあった。ここは妖怪の出入りを非公式に認めてる店の一つ。たまに命蓮寺チの連中も行く。

「だからつついて、酒を飲んでいいかどうかはまた別問題でだな……」

小言を言う前に、ずんずん入る。聞けよ。

「いらっしやーせー。お二人さんすか」

カウンターの向こうから声をかけたのは剥げた頭に手ぬぐいを巻いた、仏頂面の店主だった。風変わりな二人組を前に動じないのは、さすが普段から妖怪相手に商売しているだけある。

「まあまあ、一杯くらいは付き合いなさいよ。今日のところはおごったげるから」

「そのおごりの金も、レッスン代に使ってもらいたいんだがなあー!?」

と、カウンターに座らされたところで、やにわに客席が騒がしくなった。

背後の気配がなんか不穏だ。あいつですよ、とかいう声がこっちにまで伝わってくる。

「……評判ですな、お嬢さん。宣伝活動もろくにしてねーのに」

「誰か別のやつじゃないの。あんたとか」

ガタガタ椅子をずらす音が聞こえる。いかな、これなんか因縁つけられる系だ。

「おい、あんた。ちよいと話をさせてもらっていいか。帽子をかぶってるほうな」

と、すぐ後ろから野太い声。はい私帽子かぶってない。推定無罪。

「お呼びですよ、お嬢さん」

「はいはい、どちらさんで？」

そこに立ちはだかっていたのは長身筋肉質の男である。見た目ヤクザ者ではなさそうだが、着ている法被や頭の鉢巻からしてガテン系なのは間違いない。

「親方。止めときましようよ。別にあっしあ不都合ありませんでしたし」

と、隣で男を止めてる瘦せぎすはどっかで見えたことがある。

「……なんだ、誰かと思えば。この前ヤクザにカツアゲされてたやつじゃん」

「うちのモンがずいぶん世話になったみたいでなあ。ちよいと話をさせてもらえねえか」

……なんつくソミみたいな偶然。つーか、またしてもトラブルの予感。

がっし、と肩に食い込む指の感触。女苑につかまれている。

「……マネージャーだったら、自分のアイドルを守るわよね？」

「……こういう都合のいいときだけその設定持ち出すなよテメー」

とはいえ、残念ながら逃げ場なしのようである。腹をすえるしかなさそうだ。ゆっくり向き直って「親方」を見上げる。

「うちの『アイドル』に何か御用っすか」

一刻ほどあと。私はカウンター越しのお品書きをぼんやり眺めていた。あ、鹿肉の煮込みとかあるんだ。美味そー。小遣いに余裕があったら余裕で頼むんだがな。あははうふふ。

「ほー、そのアイドルとやらでいつデビューするんだ？」

「まだわかんないわよー。歌だつてまだ聞かせられるようなもんじゃないしー」

ゲラゲラゲラゲラと隣がうるせえ。無視したいのはやまやまだつたがテンションの上がつた「親方」が私の肩をばっしばっしとどついてくる。この辺で大工の棟梁をしているらしい。

「ほらマネージャーさんよお、あんたも話に加われや。水くせえ」

「いや……うちら体資本なもんで、酒は控えさせていたきたいんですがね」

「かーっ、何言つてやがる。お前酒屋に入っついて、それはなかるうがよ。それに、あれだ、酒は百薬の長とも言っじゃねえか」

「そーそー、私らは薬を飲んでんのよ、健康よー。あ、大将もう一杯お冷でお願い」

この女、棟梁のガタイを盾にしやがって。止めることすらできやしねえ。

ていうか、私最初からフォローいらなかったじゃないか、このコミュお化けめ！ あっさり棟梁と意気投合して肩並べて飲む仲になりやがって。まああの痩せぎすが興奮した棟梁を止めに入ってくれたからこそなんだが。ちなみにあのコートはそれなりの値段で売れたらしい。

……これで初日とかちよつと考えたたくないな。

このまま日当は順当に、飲み代に消えそうだし。明日以降はどうにかして、女苑にレッスン費用を残させる手立てを考えたほうがよさそうだ。

興味本位だったとはいえ、ちよつと早まったかなあ？

今日は私の頭が痛い。

§

翌日。私の気分などお構いなしに命蓮寺の朝は早い。

いつものように適当なところで朝の勤行を抜け出して、人里へと向かう。てゐが路傍の石に腰掛け足をぶらぶらさせていたのまでは昨日と同じだ。その隣に立つ長身の影がちよつと違う。

「踊りの稽古で来たぞ」

こころも待ち構えていた。手には薙刀、頭には狐面。なんか青白いオーラを立ち上らせてもいる。せめて人間も行き来する往来で武器は隠せ。

「ずいぶんと気合い入ってるなオメー」

「もらえるものももらえたらの話よ」

とか言いつつ、全然張り切ってるのを隠せてないのがこいつらしい。

「その話なんだが、今日に限って謝礼は後払いでいいか」

「いきなり暗雲だな」

「払いたいのはやまやまなんだが、肝心のやつがサラリーを使い込んでしまった？ あとで
宇佐さんから儲け話の相談をするから、今日のところは無償労働で頼む」

そんな話をしていけると、よく目立つシルクハットつきの影が大門に現れた。頭を押さえたま
まもつかりと歩いてくるのまで昨日と同じと来た。不安しかない。

「あー、頭めっさ痛い」

「だから飲み過ぎんなつってんのに。紹介するがこいつが面霊気の秦ころ。今日からダンス
コーチをやってもらおう。見覚えはあるか？ 憑依異変んときにもいたはずだが」

不躰にこころの姿を上から下まで見る。

「んー？ どうだろう。仙人だの賢者だの、いろいろ相手にしてたからなあ」

「もう少し敬え。今日から師になる相手だぞ」

空気がピリリとしてきたので、すかさずこころと女苑の間に割って入った。

「それで、だ。当然レッスン費を、面霊気にも支払わにゃならん。というわけでしばらくの間、

疫病神の金銭管理をさしてもらおう。これからは鰻屋台の給料から、レッスン代を差っ引いた分をお前に渡すようにする。夜雀にもそのように伝えておく」

言った端から女苑は顔を左右非対称に変形させて、チンピラの顔で私をにらむ。

「ああ!? ふざけんな、私が働いた金だぞ?」

「お前に直接渡すと昨日みたいなことになるだろうが! 全額持つてくわけじゃねーんだから、ちったあ我慢しろよ。禁欲の果てにでかい利益があるんだよ。わかるか」

「ぬぬぬ」

歯ぎしりする女苑の目の前に、てゐの小さな手が挙げられた。

「そういうことなら、私もいくらかいただいてこうかしら」

「がめついやつばっかりだわ!」

「あなたをほうぼうへ売り込むのに、いろいろと根回しを始めたんよ。そのためには手数料がいつてね。そいつらを動かすにも、小遣いをやる必要があるんだわ」

女苑が大地を踏みしめ、青筋が浮くほど握りしめた両の拳を震わせる。

「先行投資ってやつは肌に合わないわ……」

「耐えろ」

「ここに向き直る。」

「まあ、そんなわけだ。今日以降の謝礼はちゃんと出す」

「では、今日のところは黒いの言葉信じよう（ぬえだっつってんだろ）。基本的な動作を教えるから、しっかりとついてくるように」

「まったく、体育会系のお稽古多いわー」

荒れる女苑。不安未だ消えずだった。

§

女苑がここから舞踊の手ほどきを受けたあとは、昨日に引き続いて鳥獣伎楽によるポイントだ。本日の私は八目鰻屋台に残り、今後のアイドル売り出しプランについてみると意識合わせをすることにした。

プリズムリバーウィズHが使う「太陽のライブステージ」はヤツらのライブとのブックキングさえなければ条件次第で自由に使えるという。その条件とはただ一つ。その大地的な存在の妖怪にきっちり頭を下げて、太陽の焔を弾幕ごっこで荒らさないと誓約することだ。

「あいつが太陽の焔を仕切っている限り、そんじょそらの野良妖怪が手を出してくることはそうそうあり得ないわ。それこそ、人里の貧民窟よりも人間の安全が保証されてるくらいよ。だから丑の刻でも人間が安心してライブステージに通えるってわけ」

「それではプリズムリバーのスケジュールさえ押さえときゃ、箱の心配はなくなるってわけだ」

「そゆこと。宣伝はうちの部下どもと新聞を利用する、と……あんたの出る幕ないわねえ」

「戦力外通告かよ！」
てゐがけらけら笑う。

「まあまあ。平安の大妖怪さまには今後も力仕事をお願いするわ。筋を通すのに弾幕ごっこが必要な場面なんて、いくらでも出てくるしねえ」

「んー、まあ、そうだな。差し当たって腕力が必要になりそうな相手といたら」

「あいつ、かしら」

エレキギターの音に合わせて不協和音が聞こえてくる。私らは屋台のほうへと注意を向けた。昨日に続きミステリアのギターに合わせて女苑が声を出し、響子がそれをコピーしてるんだが。

「こりゃ予想以上に沸点が低そうだなあ」

「あんたもそう思うかね」

女苑の発声は、昨日以上にひどくなっているように思えた。明らかにやる気を失っている。

「中抜きのお達しを出したとたんに、あのありさまだ。もう少し我慢できると思ったわ」

「それなりに学んだと思っただがな。命蓮寺での勤行で」

「あーもう違うつたら！ 声の出しかたがなんら進歩してない！」

ミステリアの怒声が飛んできた。私は手を上げててゐとの話を打ち切る。

「力任せに歌ったって音のズレは直んないつたら！」

しかし女苑はへこまない。困ったことに。

「何さ、感覚的に言われたって加減がわかんないわよ！ 教えかたが悪いんじゃないの!？」

「んだとこらー！」

私とてゐはもういがみ合いの現場に走り出していた。

「どうするかな、ガス抜きに一回弾幕だまらせるか？」

「日中に夜雀の勝ち目なんかなくて。そしたら遺恨が残って余計にこじれるよ」

にらみ合うミスティアと女苑の間に響子が割って入っている。

「二人とも落ち着けー。みすちーもちょっと言い過ぎよ」

「叫ぶしか能のないおうむ返しお化けは黙ってる！」

「んだとこらー!？」

火に油注いでなんとする。いかん、これでは三人の喧嘩勃発で早くも物別れの危機だ。

ここは力づくでことをうやむやにするか。策を巡らせ始めたそのときだ。

最強のパワハラが私らの反対側から現れやがった。

「真昼間から喧嘩とは物騒ね。周りに迷惑かかんないかしら？」

なぜか肩を晒す赤い巫女服。そして肩に担ぐお祓い棒。私らはいっせいにそいつを見る。

死を覚悟した。

そんな中、ミスティアと響子がどうにか声を絞り出す。

「け、け、け、喧嘩とか、そそそんなことねーですよ？」

「そ、そ、そ、そうそう、ちょっとじゃああってただけですわ。ねえ？」
で、下限の半月みたいな目で女苑をにらんだ。

「ま、まあ、そういうことにしておくわ」

「それじゃあ、見学させてもらおうかしら。そのじゃれあいとやらを」

巫女服を着たパワハラこと博麗霊夢が、適当に屋台から椅子を引っ張り出す。

「……改めて基本から説明するわよ」

「聞いてやろうじゃないの」

計らずも力づくになったが、女苑がどうにかレッスンに戻る。

霊夢はその様子を見て、立てたお祓い棒に頬杖を突きひとりごちた。

「どいつもこいつも、私をいったいなんだと思ってるのかしら」

そいつを聞いてた私とてゐは、いったん顔を見合わせた。

「赤い通り魔」

「妖怪退治のために異変もくてきを選ばないやつ」

「お前から先に退治したろかい」

せっかくなので私らも椅子を持ち出した……巫女の目が光つてるとはいえど、このままあの三人を放置しておくのは不安でしかない。

「巫女の嗅覚が今回はやたら早いじゃないか。どっから嗅ぎつけてきたんだ？」

「嗅ぎつけたも何も。そちらから勝手に匂ってきたんだから、仕方がないじゃない」

霊夢がたもとから新聞紙を取り出す。広げたそいつは文々。新聞の号外だった。

日付は今日。エプロン姿のままポーズをとらされている女苑の写真が載っており、見出しに「屋台娘に身をやつす疫病神、その新たな野望とは？」とある。

笑いから力が抜ける。あの取材から一日経ってないだろうに。

「昨日の今日で相変わらず天狗のフットワークが軽いことだ」

「それで、この件の黒幕はあんたたちでいいわけ？」

がすつと、霊夢がお祓い棒を地面に突き立てる。確かな殺気。誰にとってもこいつは幻想郷のパワハラ、異変の抑止力という認識だ。

「黒幕だなんてとんでもない」

「ちよこーっと背中を押してやっただけですぜ」

二人して肩をすくめる。霊夢はそんな私らをじろじろ見やった。

「ま、いいけど。私も馬鹿やってないか、ちよつと様子を見にきただけだし。姉のいないあいつは、さしたる脅威じゃあないからね」

「そうであることを私らも願ってるよ」

「ただし、脅威になった場合は別。姉よりずっと面倒な協力者がいるみたいだしね」

鋭い眼光が私らを射抜く。

「わかつてるだろうけど、あんたたち。けしかけた以上はちゃんと最後まで面倒を見なさいよ。もしもあいつが暴走するようなことがあったら、あんたたちの保護者の背中を蹴り飛ばしてでも退治に出向くことになるからね？」

§

そんなこんなでどうにか最初の衝突は、巫女の介入でうやむやになった。

しかし、悪い意味でこれは最後ではなかったのだ。

「いよう、疫病神」

「様子を見に来たぞ。悪事をなしてはおらんか？」

「……夜になって、今度は仙人とその部下が、屋台に現れた。女苑はそいつら、豊聡耳神子と物部布都もののべのふとに警戒心を露わにしながら湯飲みを渡す。

「別にしごかれてるだけで、悪だくみなんてしてないわよ。あんたたちも私を退治に来たの？」

「またぞろ騒ぎを起こしたらんか、太子さまと見張りに来ただけよ」

「そういうこと。起こせば幻想郷から排除する大義もできるしな」

「物騒なのは代わりねえな」

まあそういうわけで、こいつらも本質的には霊夢と同じである。直近に異変を起こしたやつ
の扱いはなんて、おおむねそんなもんだ。

「そんなことより、客だぞ。たまには月の下で夕餉をとるのも悪くはない」

「新鮮ですな。ほら、落ち度のないようにしっかりと太子さまをもてなせ」

「この神さま気取りめ」「いいえ仙人です」

しぶしぶ女苑が伝票を取り出す。ミスティアが屋台から顔を出して、それに声をかけた。

「ちゃんと応対なさいよ。飯にもお客さまなんだから」

「わかってるつたら。いちいちうるさい」

「おう、まだ喧嘩したいのか？ 今は夜雀の時間だぞデメー」

ミスティアが厨房から身を乗り出したまま青筋を立てる。私はそいつを奥に押し込んだ。

「まー、お前も落ち着け。あいつもでかいこと言っちゃいるが、客の前で狼藉はできん」

「でもさー」

「もったいないことだ」

突如として割り込む新たな声に、私らはガタガタと音を立てる羽目になった。いつの間にか、
カウンターの端にところが座っている。

「また来たのか？」

「指南代の請求に来た。金銭のやり取りはこじれさせないのが鉄則だからな」

また河童資本主義の入れ知恵か。

「それはさておき、もつたいないとは？」

「小柄な体躯だけど、遠くからでもはっきり聞き取れるあの声量。磨けば光る、いい原石だ。しかし怒りの感情に阻害されて、うまくコントロールできていないように見える」

「怒りの感情ねえ」

再びミステリアがカウンターに身を乗り出してきた。

「踊りの稽古での疫病神は、どうなのよ。喧嘩とかしてないわけ？」

「いや。あれはいたって素直だぞ？」

ミステリアはのけぞって白目をむく。

「バブリーダンスだかなんだか知らんが、近いことをやっていたようだ。飲み込みは早い」

「むう、それなのになんで発声ではあんな調子なんだ……」

捌きかけの八目鰻を前に、ミステリアは思案にふけた。

「一つ質問するけれど。指南のときに、ちゃんと褒めてる？」

ミステリアが再びそころを見る。息の根止まりかけの鰻が手元でびったんびったん跳ねた。

「褒めてない、かも」

「褒め言葉は感情を安定させる。そういうときに教える物事は身につきやすいものだ」

ミステリアがあくせくとその場でしゃがみ込み、カウンターの下から紙とペンを持ち出す。

さては常備してるな、この鳥頭は。

「いったい、何を褒めればいいのかしら」

「修練を重ねるうちにわずかでも伸びてくるものが、どこかしらにあるはずだ。そういうところを褒めるといい。無為に褒めるわけではないから、その違いには注意することだな」

「ミステリアが難しい顔してメモを取り出した。その隙に私がこころに声をかける。

「教えかたに意外とこだわりがあったんだな」

「私は能楽の太祖、秦河勝はたのかむかつの面だぞ？ 生半可な指南はできん」

「店長ー、蒲焼きはあとどんくらいで焼けるー？」

「あーはいはい」

外から、よく通ると評判の女苑の声が聞こえてきた。ミステリアは慌ててメモを片づける。しばらく鰻に包丁を走らせる音が続いた。

「……しかし、慎重に様子を見たほうがいいな。疫病神の感情はどうも不安定だ」

再び、こころが口を開く。

「あいつは、どんな具合なんだ？」

「あれは常に怒り、いら立ちに満たされている。褒めれば一時的には収まるが、すぐに戻ってしまう。大事に扱わねばすぐにでも爆発してしまうだろう」

「あいつは、何かストレスでも抱えてるのか？」

今のこのころの頭の上にあるのは、猿の面だった。

「私が理解できるのは、あの子の表層の感情だけ。それを作り出している原因について推測を巡らせるのは、野暮だと思うわ」

§

翌日。その日も八目鰻屋台にエレキギターの音が響く。

「よーし、だいぶん音程が合うようになってきたよー。もう半音、いや四分の一音だけ調整してみよっかー」

と、エレキギターを抱え直す。そこでミスティアは、女苑の妙な視線に気がついたのだった。「どうしたよ」

「……なんか悪いものでも食べた？」

「あんたねえ、たまに評価してやったと思ったらなんだその反応は」

私はすぐさま女苑の背後に回り込んだ。ミスティアから見える位置から手を振る。

「……まあ、いいや。もう一回やってみるよ」

首を傾げる女苑をよそに、もう一度エレキを爪弾いた。

あーあ、夜雀ですら成長してんのに、この疫病神ときたら。条件反射レベルでミスティアに

褒めることを覚えさせたら、半日かそこらでどうにかさまになってきたぞ。

「なんとか飽きずにやれてるみたいじゃない？」

「お前らまで来やがったんかい」

と、そこに現れたのは命蓮寺くつの身内の、村紗水蜜むらさみみつと雲居一輪くもいちりんの二人。一輪は雲入道の雲山うんざんも霧散した状態で連れてきてるはずだから、正確には三人か。

「あんと響子が毎日早い時間に出ていくからね。いやでもばれるわよ」

「まあそれは覚悟の上だからいいんだが。聖はどうしてる？ あいつだったら真っ先に様子を
見に来そうなんだから」

水蜜が一輪に視線をやる。その一輪は首を横に振った。

「姐さんはいつも通りよ？ あんたも見てるでしょう？」

「あのかたなりに、思うところもあるのではないかな。あえて顔を出してないんだと思う」

「まあ、本当に気づいてない可能性も無きにしもあらずだけど」

私は先日の白蓮とのやり取りを思い出す。

……………読めん。

「むしろそれを疑わなきゃいかんのが怖いな……」

「本人に直接聞いてみたらどうかかな？」

「勘弁してくれ。何が逆鱗に触れるか実に正体不明じゃないか」

またしても、夜になる。今度は文が、同僚の天狗を連れてやって来た。

「意外と長続きしてるみたいね。疫病神は刹那的だと聞いたから、もっと早くに投げ出すものかと思つたわ」

「あいにくだったわね。自分でもよくここまで続くもんだと感心することしきりだわ」

毒づく女苑。それをツインテールの天狗がしげしげと眺めながら、焼酎の湯飲みを傾ける。名前は確か、姫海棠ひめかいどうはたてと言つた。そのはたてに、文が食つてかかる。

「彼女を取るのになしよ。私の取材対象なんだから」

「わかつてるって。ちよつと私の興味は別のところにあつてね。ねえ、聞いてもいい？」

むくれる文を前にはたてが身を乗り出した。女苑は眉根を寄せる。

「何の話よ」

「あなた最近、お姉さんと会えてる？」

女苑が口を結んで、身を固くした。

私は屋台からそいつを聞いている……少し身構えたままだな。

しかしよくも悪くも空気を読まずに、はたては質問を続けた。

「あなたのお姉さん、天人とつるんで幻想一の嫌われ者にのし上がったけれどもね、その後の消息がばったりなのよ。天界は遠いし、私の念写にも最近の姿は写ってこないし。妹のあなただったら何か知ってるかなと思ってるね」

「知らないわ」そう切り捨てて、そっぽを向く。「知るものですか」

「連絡とかもないのかしら？」

女苑ははたてに背中を見せたまま、手をひらひら振った。

「今もどこかで、よろしくやってるんじゃないのー？ 私の知らないところで幸せになってるやつのことなんて、どうでもいいことだわ」

「もしも顔を見せることがあったら、教えてほしいんだけど」

「あんまりあてにしないでよー？ 本当にあいつは最近、便りすらよこさないんだから」

むくれ面で女苑が屋台に戻る。はたてはテーブルに立て肘を突いて、しばらく女苑の動きを目で追いかけていた。

私らも屋台の裏手に消える女苑の姿を目の隅っこに捉えていた。あえて深追いはするまい。

「わかりやすいことだ」

「そだね。あれ、どうにかする？」

私はてゐを見る。

「昨日、面霊氣が言ってたこと、覚えてるか？」

「もちろん」

「その上で、あの態度だ。一度姉を探してきたほうがよさそうもんだが」
カウンターを指でつつきながら、考える。

「天狗の調査網にも引っかからんような場所となると、手に負えんな。どう探したものやら」

§

天狗たちが帰ってからしばらくして、八目鰻屋台は店じまいとなった。

「はい今日のバイト代」

「あいよ」

女苑がミスティアから、封筒をひったくるように受け取る。

「あー、今日も薄いお給金だわ。よくやってると思うんだけどなあ」

「レッスンとかに必要なぶんは差っ引いて渡してんだから、仕方ないでしょ」

「別に私は、手取りが少ないのに文句言ってるんじゃないのよー。その大元が少なくて割りに合わないって言うだけー。売り上げの大半は、私目当ての野次馬じゃん？」

「それ、結局同じことで文句言ってるってことじゃないの」

女苑はそいつを無視して、屋台を出る。

「使うなどは言わないけど。毎日どこに消えてんの、そのお金」

「私が正當に稼いだお金を何に使おうが、私の勝手でしょう？」

女苑の小さくなる背中を見送って、ミステリアは肩を落とした。そして、あらかじめ分けておいた封筒を私とてゐに差し出す。

「もう止めないの？」

「私らも、もらうもんもらってるからなー。これ以上金銭奪うようなことやったら、今度こそ爆発するんじゃないか？ それに」

封筒を弄びながら、私は頬杖を突いた。

「あいつに引つ張られてくのもさすがに疲れてきた。プライベートであいつがどう金を使うのかくらいは、大目に見てやろうさ」

§

……まあ、ぶっちゃけ。いつまでも酒気を隠して命蓮寺に戻るの、いろいろ辛い。妖怪にだって休憩は必要なのだ。とつと寝床に潜り込んでリフレッシュする時間が。

それで、命蓮寺の門前までたどり着いた私の視界の隅に、揺らぐ影が見えた。

まだ、ゆっくりできそうにないなあ。しかし、正体不明の私に目くらましとは笑わせる。

「そろそろ来るころだと思ったよ」「うわ、ばれた」

揺らぎが像を結んで、にとりが姿を現した。山の妖怪の新聞記事になったんじゃ、まあ当然ばれるわな、こいつにも。

「こんなところに押しかけて来やがって。何の用だ？」

こっそり隠れ潜んでいたにも関わらず、にとりにはやけ笑いを浮かべて私に詰め寄ってきた。「天狗から聞いたぞー。例の疫病神とつるんで新しいことを始めようとしているそうじゃないか」「まだうまくいくと決まったわけじゃないね。あいつが折れればそこで立ち消えになる話を、周りが声高に囁し立てて外堀を埋めてる状態さ」

すげなくあしらうつもりだったが、この程度で引き下がるような河童じゃあない。

「手伝ってやるから、私も混ぜろよ。あいつらが起こした憑依異変、あつただろう？ あれに乗じて人工憑依を発明したはいいが、副作用があるってんでできないようになっちゃってさあ。なんかあいつらに落とし前をつけさせないと、収まりがつかん」

「逆恨みもいところだな。異変に相乗りの金稼ぎなんて、長続きするわけがない。早々に諦めて別の稼ぎ口を探したほうがなんぼかマシだと思っけどね？」

「そうは言うけどさあー」

私は通用門に手をかけて、にとりを見る。

「ついでに言っとくと、河童を雇う元手がない。女苑のプロデュースはあらかたDIYでやつ

てるからな。無償奉仕も同然で参加してもらうってんなら考えてやってもいいが」

「あばよ鶴妖怪、時間取らせたな」

「切り捨て判断超早い」

にとりのリュックが開いて、細長い物体がによつきり生える。そいつは頭の上で四方に開き、回転翼へと姿を変えた。

「河童ビジネスは機を見るに敏。せいぜい寄せ集め集団で頑張るこった」

回転翼を回して空へと飛び立ったにとりを見送りながら、内心舌を出す。早々に興味を失つてくれたのは、正直ありがたい。

とはいえ、まかり間違つて売れでもしたら、また食いついてくるに違いない。今後の舵取りがキモになりそうだ。

§

こころと鳥獣伎楽による女苑のレッスンは、その後もしばらく続いた。また八目鰻屋台にもひつきりなしに物見遊山の客がやってくる。女苑はぶちぶちと文句を言い続けながら、そいつを続けていた……いつブチ切れるのかと、私たちを常にやきもきさせながら。

女苑にも上達のきざしがあつたが、単調なレッスンばかりだと、ダレてくるのは否めない。

そろそろきちんとした歌を唄わせて、舞台に立たせるお膳立てを整えるべきでは。そうてゐや鳥獣伎楽とも話すようになってきた。

そんな夜のことだった。その日も女苑は、エプロンを身につけ新たな客の到着を足踏みしながら待っていた。そこへ最初に現れた二人組の影に、ヤツあ一瞬だけ顔を強張らせた。

「あら、いらっしやい。今日は客じゃなくて、店員よ」

「いいよ。話は聞いてるから」

弁々が知った様子でテーブルにつく。八橋がその向かいに座ると、さっそくに両手を組んで女苑を見上げ、目を細めた。

「その後、歌の練習に取り組んでるって話も聞いてるわ。前は惨憺たる結果だったけれど……リベンジしてみるつもりはないかしら？」

女苑と九十九姉妹との間に、張り詰めた空気を感じた。私もてゐも暖簾を跳ね除け、そっちを見る。今日はミステリアに加えて響子も店を手伝っていた。

全員が全員、その緊張を感じ取っていたのだ。そして九十九姉妹の背後に漂う、ただならぬ存在の妖力をも。私はてゐに耳打ちする。

「誰か連れてきてるな」

「ああ、間違いないねえ」

女苑もそいつを察しただろう。一つ唾を飲み込み、エプロンを外した。

「やるわ」

「結構。まあ、肩の力をお抜き。楽しもうじゃないか」

弁々が琵琶を構える。加えて、八橋も椅子を少しずらすとスカートをはいと撫でた。柄にも見えた五線譜が浮かび上がり、琴の弦へと姿を変える。

「さて、何を歌う？ 先日と同じく童謡でいいかねえ……八橋もいいかい？」

「いつでもオーケーよ、姉さん」

二人は同時に弦を弾いた。森の中に、少し早い桜の歌が鳴り響く。
女苑は息を吐き、息を吸い、それに続いた。

「——！」

屋台の影で、ミスティアと響子が拳を打ち合わせる。

変わった。正当に進化した。少なくとも今回は「ほげえ」ではないことくらいはわかる。

女子二楽坊の演奏に負けず、そして殺さない。磨けば光るところが評した原石が、確かな輝きを放ち始めようとしていた。

歌は静かに終わり、そして女苑は前を見据える。

九十九姉妹の頭上を飛び越したその先、木立の中に潜む存在を。

「これで、満足かしら？」

ぱん、ぱん、ぱん、と、乾いた音が鳴って、茂みが揺れた。

「なかなかのものじゃないか。聞いていたのよりはだいたいぶんマシになったようだ」

そんな声とともに、白いジャケットにショートパンツの女が姿を現した。後ろに続くのは黒いベストに黒いとんがり帽子の女。

……はは。まさかこいつらが一緒に来るとはな。

新進気鋭の付喪神、プリズムリバーウイズHのHのほう、堀川雷鼓が女苑に歩み寄る。

「はじめまして……じゃないね依神女苑。でも、こうして話をするのは初めてか。ずいぶんとまあ、私たちのライブを荒らしてくれたじゃないか」

女苑が歯を見せて、笑っている。

「冷静さは必要かしら？」

お付きの女、ルナサ・プリズムリバーがどこからともなく人魂じみたバイオリンを取り出す。

「大丈夫さルナサ、今の私はだいたいぶんクールだ。このまま続けさせてよ」

「お礼参りをかしら？」

女苑と雷鼓が向かい合った。春の早すぎる遠雷が鳴り渡る。先に横を向いたのは雷鼓だ。

「弁々と八橋から話を聞いて半信半疑だったんだけどね。あんたがアイドル修行してるってさ」

雷鼓は思案するように、その場をゆっくりと歩き回った。

「でも、今のパフォーマンスを聞いて、はつきりとしたことがある。だいたい今のレッスンに、真摯に取り組んでいるってこと。そして、まだ伸びしろがあるってこともね」

「ま、まあね。当然の結果でしょう」

「そこで」

雷鼓は笑顔を女苑に向けた。

「私たちと、さらなるレッスンを積んでみるつもりはないか？ あんたにその気があるのなら『コンサート会場の強奪犯』の汚名を返上するチャンスをやろう。プリズムリバーウィズHの前座として、あんたにステージに立つてもらおうんだ」

思わず身を乗り出した。急展開だ。女苑もまた、両手の拳に力が入っている。

「前座。あんたたちの引き立て役になれなくて解釈でいいのかしら？」

「もちろん、その側面は否定しないよ。でもあんたのパフォーマンス次第によっては、メインを食う前座になることだって十分にあり得る。ねえミスティと響子、ちょっといいかい？」

鳥獣伎楽の二人が何事かと顔を出す。

「あんたたちで『今宵は飄逸なエゴイスト』を演ってみないか。スコアノートは貸すからさ」

「ひ、飄逸なエゴイスト！」

ミスティアと響子の声が、絶妙のユニゾンを奏でた。

「プリズムリバーウィズHのオープニングナンバーとして定番の」響子が。

「ファン人気も無茶苦茶高い」ミスティアが。

「あのエゴイストを私たちが!」お互いを指差しながら。

「すごい説明的なりアクションを、どうもありがとう。それで、あんたたちのバックバンドで女苑が歌うのさ。歌詞はこれからつけるよ」

鳥獣伎楽は手と手を握りあいながら、なお武者震いに揺れている。

「すごい大盤振る舞いにビビるんですけど」

「それこそプリズムリバーが演ったほうがいいんじゃない？」

「うちはあくまで、インストウルメンタル一本だからね。ステージの全てをプリズムリバーのイカした演奏と、可愛い三人を見てもらうために使いたいんだ」

「二人ね」

ルナサが静かに笑う。

「当然、そこまでやるからには生半可なステージじゃあ許されないよ。これから女苑にはより厳しいレッスンを受けてもらう。プリズムリバーの前座を努めるのに相応しいパフォーマンスとコンデイションを整えてもらうんだ。どうだい、荷が重いのと思うかい？」

雷鼓が女苑を見る。その女苑は、半笑いのまま固まった。

ほろん、と八橋が一度、琴を鳴らす。

女苑の顔から、みるみるうちに汗が吹きこぼれだした。

「……やるわ。プリズムリバーウィズHの前座、やってやろうじゃないの」

「受けてくれると思ってたよ。で、ミステイと響子は？」

ミステイアが地面を見下ろす。

「うーん、女苑のバックバンドか……」

そんなミステイアの肩を、響子が叩く。

「胸を張ろう、みすちー。女苑はわしらが育てた」

「……よし、やるか。鳥獣伎楽ウィズJで捲土重来を」

雷鼓は大きくうなずいた。

「決まりだね。それじゃあ、女苑はバイト上がったら私と一緒に来てくれ。プリズムリバーのお屋敷でみっちりやるからね。家主の許可は取れてるから」

「厳密には私たちも家主ではないのだけど」と、ルナサ。

「マネージャーさんたちもそれでいいかい？」

暖簾を跳ね除け、外に出る。

「そんなごたいそうなものでもないがな……まあプリズムリバーウィズHじきじきの申し出となりや、願ってもないや。レッスンはお任せするよ」

「ああ。ピカピカのアイドルにしてお返ししよう」

すると女苑がゆっくり振り返って、こっちに向かって歩いてきた。右足と右手、左足と左手を同時に出しながら。ヤツは私の目の前まで来て、言った。

「……あまりに唐突すぎるんですけど？」

「当初、望んだ通りになったじゃないか。プリズムリバーの名前を出して、ワクワクしてよ。それがなくなったんだから、もっと喜ばにゃいかんだろう？」

女苑は口を噛み締め、両手を握りしめる。

「そうか……そうよね……」

自らに言い聞かせる女苑からゆっくり離れると、私はてゐに向き直った。

「とはいえこいつは、うまく行き過ぎて怖いくらいだ。こういうときにこそ、落とし穴がある」
てゐは静かに目を伏せた。

「墓穴を掘るのは、どいつだと思う？」

私は、周囲を見回す。お互いに櫓を入れあうミスティアと響子、無言で微笑み状況を見守るルナサ、そして、女苑を見ている雷鼓を。

「意外とあの雷太鼓な気がするな。ありやまだ付喪神としちゃ若輩の部類だ。今までは自分と同じ音楽家相手にうまくことを進めているが、手前のマネジメントを過信してないとは限らん。何しろ次の相手は依神女苑、泣く子も黙る疫病神だからな」

「私も同じ見立てかしらね……さて、どうする？」

「これまでと同じ。やれることをやるまでさ」

腕を組み、その場から視線を外す。

「このまま雷太鼓に手柄を持ってかれるのも、気に入らんしね」

地底。力自慢の鬼が嫌われ者の妖怪たちを統べる、幻想郷の番外地。鬼と賢者は相互不干渉の協定を築いており、みだりに妖怪が行き来してはならない決まりになっている。

しかしそいつはあくまで表向きの話だ。少なくともかつての異変で地上につながり道ができてからこのかた、地底の連中はわりと気軽に地上へ出てくるようになってきているからな。私や村紗、一輪などもその一部だし。人間相手の観光旅行を企画してるやつらまでいる。

その地底の奥深く、古くは地獄であった場所に、鬼たちがかつての栄華を懐かしんで築いた都市「旧都」がある。その片隅にある酒屋が沸いていた。

「地上妖怪何するものぞ！」

「そうだー！」「ぶっ潰せー！」

ちゃぶ台で作った簡易舞台の上で、ヤマメが氣勢を上げている。

「あいつらはけんもほろほろに私を追い返すが、私は負けないよ！　いつか地上にアイドルとして降り立ち、地底の明るい網の名を知らしめてやるぜえー」

「いいぞお、ヤマちゃん！」「地底の奥底から応援するぜ！」

ヤマメを無責任に囃し立てる鬼ども。何しろあいつらは無駄に頑丈なので、ヤマメが起こす

病気なんてものともしないのだ。

一頻り歌い騒いで満足したところで、ヤマメは自席に戻り盃を平らげる。赤い顔で鬼の酒気を口から吐き出し、とろけた笑みを浮かべる。

そこに、冷水のような言葉が浴びせられた。

「地底のドン・キホーテ」

「あんだそりゃ。量販店の名前なんかかい？」

向かいに座った水橋みずはしバルスイがクスクス笑う。

「地上の人間が創作した、自分を偉大だと思ひ込んだ騎士の名前よ。今のあなた、わりと似た感じになってきてるわ」

「相変わらず人を煽るのが好きなやつだね、あんたは。もうずっとアプローチは続けてんだ、今に地上にも伝手ができるともんさ」

「具体的な策が何もないわねえ」

冷笑が投げかけられる。ヤマメは顔をしかめてバルスイを威圧した。

「あ、あるにはあるさ。地上に鳥獣伎楽つてえ落ち目のパンクバンドがある。今はそいつらを口説き倒してる真つ最中さ。折れてくれれば地上でメジャーデビューの芽だつて」

「鳥獣伎楽ねえ。こういうの、知ってる？」

バルスイは懐から一枚の紙切れを取り出し、薄汚れたそいつを広げてみせた。

「天狗の新聞じゃないか。そんなもん、どこで拾ったんだい？」

「あなたがアイドルごっこにうつつを抜かしているところに、風穴を抜けてきたのでしようよ。それとも、あいつらと一緒に落ちてきたのかしら。最近地上からやって来た、迷惑な連中と」

ヤマメが新聞紙を受け取る。そいつを見るだに、新聞紙を握る手が震え始めた。

「なにに『お騒がせの疫病神、アイドルに電撃転身！ バックバンドに鳥獣伎楽』……ど、どういふことだい、こいつは」

「どうにもこうにも、文字通りの意味よねえ。あなたの言った鳥獣伎楽と同じかしら？」

ぐしゃり、と哀れな新聞紙が横方向に潰れた。

「……ちよいと席外すわ」

ヤマメが新聞を握りしめて居酒屋を出ていく。そいつをパルスイが盃を傾けながら見送った。

「あらあら、地上の情報が手に入るのってなかなかないのよ？」

周囲に座っていた鬼がパルスイにすり寄り、肘でつつく。

「パルちゃん、知ってて煽ったろう？」

「まあね。あの子が奮起しても挫折して泣き寝入りしても、私はあの子の嫉妬で大いに潤うわ」

「相変わらず陰険だねえ」

パルスイはぐいっと盃の残りをあおる。

「知らなかった？ ああ、今日も土蜘蛛の嫉妬でお酒が進む」

居酒屋の木戸が、荒々しく開け放たれる。ヤマメは握りしめた新聞紙を払うように投げ捨てると、そのまま旧都の入り口に向けてずかずかと歩きだした。

その新聞は旧地獄の風に乗って転がり、たまたま居合わせた行人のつま先に当たった。そいつは新聞を拾い上げ広げてみると、中身を一読して薄笑いを浮かべる。

「……あらあら。地上でこんなことが。たまには外に出てみるものだけわ」
新聞紙のしわを伸ばし折りたたんで、懐にしまう。

「これはあのかたにもお知らせしたほうがよろしいかしら」



2784545018024



2920100015002

完全憑依異変のその後、人里でのカツアゲに勤しんでいた女苑にぬえが声をかける。彼女はてゐ、鳥獣伎楽を巻き込みアイドル興業に手を付けた。

しかし女苑のトレーニングは難航するわ、対抗馬は現れるわと修行は波乱続きに。増して女苑は最凶最悪の疫病神。ぬえは奔放に散財する彼女に手を焼き、てゐの不気味な予言に心惑わされる。

果たして波乱の末に、誰かが病に倒れることはあるのか……？

憑依華で女苑を最初に見て「描くパーツ多いなコイツ(切実)」と思ひ、その次に「バ○ナムなりに行ってアイドルでもやってみろ」と思ったので本当にアイドルになっていただきました(何)